第２節　屋代遺跡群における古代の土器編年（その２）

―善光寺平南縁の10世紀前半～11世紀後半の土器編年―

はじめに

屋代遺跡群・更埴条里遺跡（以下屋代遺跡群と呼ぶ）の発掘調査で出土した７世紀～11世紀の土器のうち『古代１編』では７世紀前半～９世紀後半の土器編年を行った。今回は古代の土器でその対象とならなかった10世紀前半～11世紀後半までの土器編年を行う。

１　時間軸の設定

７世紀前半～９世紀後半の土器編年における時間軸の設定は、各遺跡で最も出土量が多く変化がとらえ易い杯Ａの形態変化・量的変化を基本にして行った（須恵器杯Ａ等）。これに続く10世紀前半以降の土器編年についても、同様に杯Ａの変化を基本に据えて時間軸を設定する。10世紀前半以降の食膳具で杯Ａの主体となるのは、土師器杯Ａである。これまでの研究で明らかにされている土師器杯Ａの変化で重要な点は、法量に縮小傾向がみられることである。その大略は、初めに口径に著しい縮小がおこり、口径が10cm前後まで縮小した時、今度は器高に著しい低下傾向がみられる。また、この時、大小の２法量分化という現象も確認される（原　1989）。今回、この土師器杯Ａの変化の方向にそって屋代遺跡群で出土した良好な資料群を並べると、切り合い関係の上からも、更に共伴する灰釉陶器の編年観からも矛盾しないことがわかった。そこで、ここで並べた良好な資料群を「古代～期」と呼んで土器編年上の時期軸とすることにした。同様の方法で設定した７世紀前半～９世紀後半の時間軸は、古代０期（古墳９期）～古代８期であったが、それに継続するものとして今回、古代９期～古代15期までの時間軸が設定された。

以下、各期を設定した基本的特徴（定義）を示す。（　）内はその期の良好な資料をもつ遺構である。屋代遺跡群出土資料で十分でない時期の資料については、屋代遺跡群にできるだけ近い他の遺跡の資料を参考にした。

古代９期：　食膳具の主体は、黒色土器から土師器に逆転し（以後、食膳具の主体は土師器となる）、土師器杯ＡⅡの口径は、おおむね11.0cm～13.5cmの範囲に分布し、その口径平均は12cm台となる段階[注1]。

（SB9025、SB1001、SB865、SB826、SB1002、SB1005、長野市屋地ⅡB10号住）

古代10期：　土師器杯ＡⅡの口径は、おおむね10.0cm～12.9cmの範囲に分布し、口径平均は11cm台に縮小する段階。

（SB806、SB821、SB833、長野市田中沖Ⅱ19号住、長野市南宮14号住）

古代11期：　土師器杯ＡⅡの口径は、おおむね9.5cm～11.5cmの範囲に分布し、口径平均は10cm台に縮小する段階。器高はおおむね2.5cm～3.6cmに分布し、器高平均は2.9cm～３cm強の段階に集中する。

（SB9053、高速道鶴前SB45、長野市田中沖11号住）

古代12期：　土師器杯Ａに明瞭な大小の２法量分化が出現する段階。土師器杯Ａの縮小傾向と明瞭な２法量分化に伴い前段階の土師器杯ＡⅡは杯ＡⅢと呼称されるようになるが[注2]、その口径、器高は前段階とほぼ同じ値となる。

（SB9035、SB15、長野市田中沖Ⅱ54号住、長野市二ツ宮２区５号住、長野市三輪（２）１号住、松原34号

住）

古代13期：　土師器杯ＡIIIの器高は、おおむね2.0cm～3.4cmの範囲に分布し、器高平均は縮小し、2.6cm～2.8cmになる段階。

（SB4004、SK5013、SB3028、SB3022、長野市南宮３号住、長野市屋地ＩＩB17号住）

古代14期：　土師器杯ＡIIIの器高は、おおむね2.0cm～3.0cmの範囲に分布し、器高平均は縮小し、2.1cm～2.5cmになる段階。少数であるが器高１cm台のものがみられ始める。

（SB46、SB4201、SB４、SB21、SB3027、SB101、SB１、長野市三輪（２）３号住）

古代15期：　土師器杯ＡIIIの器高は、１cm台のものが増え、おおむね1.4cm～2.3cmの範囲に分布し、器高平均は、2.1cm未満となる段階。

（SB9015a、SB40カマド周辺、SB40覆土、SB2、SB18、長野市屋地ＩＩB2号住、同B11号住、長野市二ツ宮５区２号土坑）

この時間軸をもとに古代８期～15期までの土器編年図を編年表５（付図２）として作成し、編年概念表を編年表６（付図３）として示した。古代０期～８期までを対象とした『古代１編』で、付図８～10として提示した編年表１～３の中で、古代８期の終わりに×印をつけた器種が、９期以降でわずかに存続するものもその後の検討で明らかになったため、編年表５には、古代８期から存続期間についてより明確になったものを掲載した。

２　食膳具の変容

(1)　土 師 器

Ａ．杯Ａ（編年表５　上段・編年表６）

古代８期に出現し、９期以降の食膳具の主流をなす器種である。大小の２法量をもつが、小さい法量の杯Ａが圧倒的に多数をしめ、11期までは杯ＡＩＩが、12期以降は杯ＡIIIが主流となる。８期～11期まで大小の２法量は存在するが、大きい法量（杯ＡＩ）はわずかである[註3]。12期以降、２法量分化が顕著にみられるようになり、大きい法量である杯ＡＩＩの数も一定量みられるようになり[註4]、まれに、口径15cm以上の杯ＡＩもみられる。大小の法量とも時期の推移とともに、法量における縮小傾向がみられ、各時期の小さい法量の杯Ａは、時間軸を設定する際の重要な指標となる。小さい法量の杯Ａ（11期までは杯ＡＩＩ、12期以降は杯ＡIII）は、13期までは口径の縮小傾向が顕著であり、12期以降器高の縮小傾向も顕著となる（編年表６）。各期における小さい法量の杯Ａの法量の目安は、「１　時間軸の設定」の項で述べたとおりである。

Ｂ．椀・小椀（編年表５　上段）

椀は古代８期に出現し、９期以降も一定量の出土がみられ15期まで確認できる。法量は口径13.5cm～15cm台におさまるものが多い。形態的には（図85）ア、腰のはる丸みをもつ器形　イ、腰がはらずまっすぐに口縁までのびる器形　ウ、口径に比して器高が高い深椀系の器形がみられる。12期以降、ウの深椀系の中に腰に丸みをもつものも顕著にみられるようになる。また、黒色土器Ａ椀にくらべて、脚の長めのものが多い。

小椀は９期以降わずかずつだが継続してみられ、13期以降一定量の出土がみられる。法量は口径10.0cm以下のものが多い。それよりもやや大きめのものもわずかにみられる。形態的には、椀と同様に、ア、腰のはる丸みをもつ器形　イ、腰がはらずまっすぐに口縁までのびる器形の両者がみられる。８期にみられる土師器皿Ｂと近い形態のものもあるが小椀のほうがはるかに口径が小さく、口径が13cm前後の土師器皿Ｂとは明確に区別できる。

Ｃ．盤Ｂ（編年表５　上段）

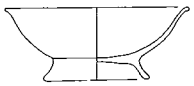
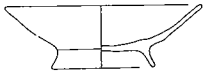
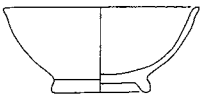
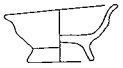
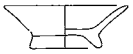
器形	形態分類 / 時期	ア、腰のはる丸みをもつ器形	イ、腰がはらず、まっすぐに口縁までのびる器形	ウ、深椀系の器形
椀	古代 9～10期	9期  SB810-2	9期  SB9038-5	10期  高野Y48号住-37
椀	古代 14～15期	14期 三輪(2)３号住-180	15期 SB107-7	14期 三輪(2)３号住-181
小椀	古代 13～14期	13期  SK5013-4	14期  SB23-2	

図85　土師器椀・小椀の形態　　S＝1：6

古代８期からみられる器種である。15期までみられるが数は少ない。椀・小椀とは脚の長さで区別するがどちらに分類していいか迷う例も多い。大きい法量の盤ＢＩが一般的であり、14期からは小さい法量の盤ＢIIが複数の遺構から確認できる。近隣の遺構も検討すると、９期から盤ＢＩと盤ＢIIの大小の２法量をもちながら存続していることがわかる。

Ｄ．皿Ａ（編年表５　上段）

口径12cm台前後のⅢＡIIは、古代８期と９期にみられる。詳細は『古代１編』参照。このⅢＡIIとは別にごく少数ではあるが口径10.0cm以下で器高が１cm台のⅢＡIIIが13期と14期に確認できる。これは、当該期の遺構の複数の土師器杯ＡIIIと比較した時、とびぬけて器高が低い一群として抽出できる。15期は土師器杯ＡIIIも器高が１cm台になるものが多く、ⅢＡIIIとは区別ができないため、存在しないと考えておく。明確な確認例はみつけられなかったが、ⅢＡIIIに対応する口径が16cm以上の大きい法量のⅢＡＩも同時期に存在する可能性がある。

Ｅ．盤Ａ（編年表５　上段）

古代６期から確認できる器種である。量的には非常に少ない。11期に確認例がないのみで14期までは確認できる。完形例はなく破片が多い。底面に穿孔をもつ例もみられる。また、内面がすすけている例も多い。

Ｆ．高盤（編年表５　上段）

Ⅲ型（まれに杯型）の器に、径が大きくかつ高い脚台のついたものである。屋代遺跡群ではほとんど出土していないが、長野市南宮遺跡、田中沖遺跡等で確認例がみられる。少数器種であるが古代９期～13期まで確認でき、大小の２法量をもつ。

Ｇ．鉢Ａ・Ｂ（編年表５　上段）

古代７期から確認できる器種である。鉢Ａは近隣の遺跡では10期、12期にも確認例があり、片口をもつ14期のSB21にも１例似た形態のものがみられる。少数ではあるが、各期をとおして存続している可能性がある。鉢Ｂは９期以降はほとんど確認できていない。

H．その他

柱状高台皿がSB28から１点出土している（編年表5-52）。遺物量が少ない遺構だが古代14～15期に位置付く。柱状部分は中空にはなっていない。似た形態で柱状部が中空で長い脚になるものは高盤として区別される。両者の関係については不明である。皿Ｂと耳皿はごく少量存在する。詳細については不明な部分が多い。

(2)　黒色土器Ａ

Ａ．杯Ａ（編年表５　上段）

古代７期、８期と食膳具の主流を占めた器種であったが、９期には急激に衰退・減少し、10期～15期にかけてはごくわずかみられる程度となってしまう。この量的関係を示すために編年表６に各期の代表的遺構の食膳具における黒色土器Ａ杯Ａの割合を重量比で示した（屋代遺跡群以外の遺構は個体数比）。

Ｂ．椀・小椀（編年表５　上段）

椀・小椀とも古代６期からみられる器種であり、９期以降もひきつづきみられ、両者とも15期には少量となるものの重要な食膳具の１つである。法量の面からみると（図86）、８期までの傾向をひきつぎ引き続き大小の法量に分化している。前回の考察（『古代１編』）で８期までの特徴として小椀では、タイプ①（口径10cm台前後）、タイプ②（口径12cm台前後）、椀ではタイプ③（口径14～15cm台前後）、タイプ④（口径17cm台以上）にわけて考えたが、９期以降については、椀ではタイプ③がひきつづき主流をしめ、タイプ④はごくまれにみられる程度である。また、小椀はタイプ①とタイプ②の中間の法量である口径11cm台前後のものがみられることが多くなる（タイプ⑥）。そして、タイプ⑥よりも明らかに小さい口径10.5cm以下のタイプ⑤も出現し一定量みられるようになる。タイプ⑤の器高は4.0cm以下のものが多く、タイプ⑥と１cm前後のひらきがあり口径と器高か

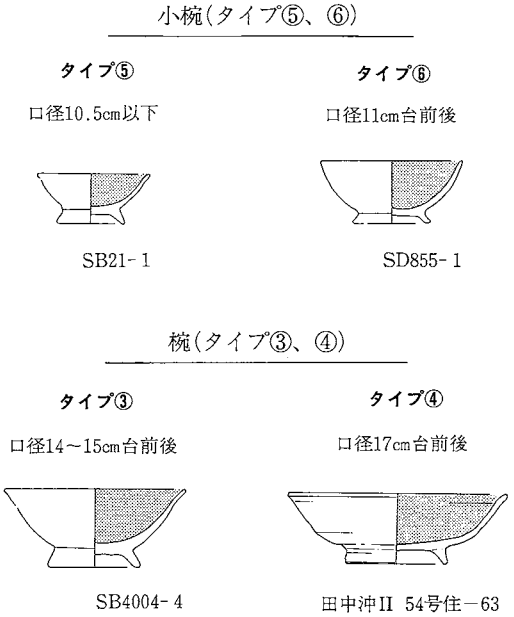


図86　黒色土器Ａ椀・小椀　法量からみた分類（古代８期後半以降）　S＝1：6

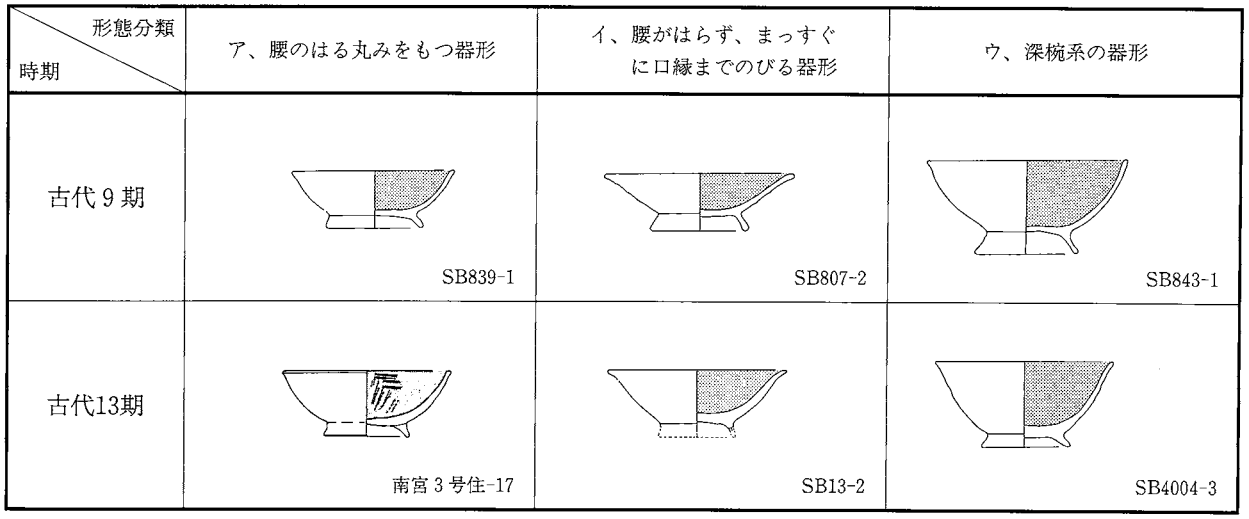


図87　黒色土器Ａ椀の形態分類と異なる時期の同一形態の器形（古代９期と13期）　S＝1：6

ら一見して識別が可能である。タイプ⑤の出現は10期にはみられるようである。14期以降タイプ⑥はほとんどみられなくなる。形態の面からみると(図87)、椀ではア、腰のはる丸みをもつ器形イ、腰がはらずまっすぐに口縁までのびる器形　ウ、口径に比して器高が高い深椀系の器形がある。長い時期幅にわたって同一形態のものがみられ、形態だけでは編年上の特徴をみいだすことはむずかしい。このことを示すために９期と13期の同一の形態の例を図87に示した。小椀にもアとイとウのすべての形態がみられる（図88)。椀・小椀をひとまとめにして形態の特徴をみると、アの形態が多く、さらに脚も短めのものが多い傾向にある。内面のミガキについては、15期の例ではミガキは明らかに退化して、雑なものになっているが（SB25-1、SB40-1)、14期までの例では、黒色土器Ａ杯Ａのような時期の推移にともなう明確なミガキの退化傾向は確認しずらかった。

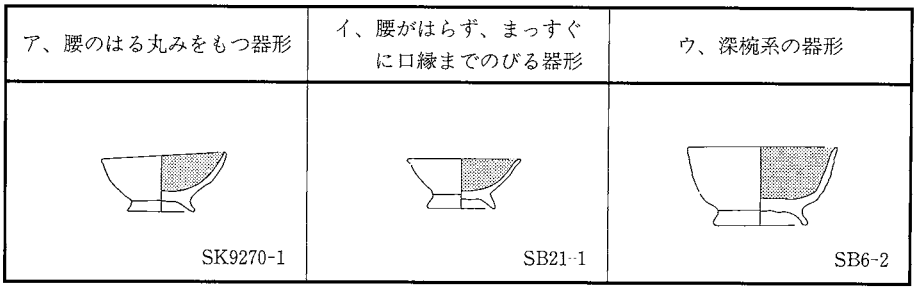


図88　黒色土器Ａ小椀の形態分類　　Ｓ＝１：６

Ｃ．盤Ｂ（編年表５　上段）

椀に足高高台を付けた形の盤ＢＩは古代８期からみられたが、ごくわずかであるが９期、10期、13期に確認例がみられる。盤ＢＩ・II共に少数器種であり、詳細については不明な部分が多い。

Ｄ．鉢Ａ・Ｂ（編年表５　上段）

古代６期からみられた器種である。鉢Ａは近隣の遺跡の例も検討すると12期まで確認例がみられる。鉢Ｂは９期のSB807に小片で確認できるが、ほとんど確認できない。

Ｅ．その他

皿Ａ、皿Ｂはごく少数であるが、古代10期まで確認例がある。耳皿は11期の牟礼バイパスＣ地点２号土坑で一例確認できる。

(3)　黒色土器Ｂ

Ａ．椀・小椀（編年表５　上段）

古代６期からみられる器種である。量的にはわずかな器種であるが、大小の２法量に分化しながら15期まで確認できる。

Ｂ．その他

皿Ｂ、耳皿も少量だが確認できる。少数のため詳細は不明である。また、杯ＡIIIが１例のみ古代14期前後のSK402から出土している。底面は回転糸切り痕が残るが、他の内外面にはミガキがほどこされ黒色処理される（図89-1)。盤ＢIIも14期のSB3027から１例のみ確認できる（図89-2)。器面が荒れておりミガキの有無は確認できないが、内外面と高台の内面まで黒色処理される。杯ＡIIIと盤ＢIIのいずれも一般的にはみられず特殊品である。

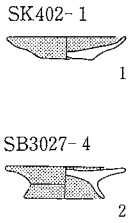


図89　黒色土器Ｂ特殊な器形
Ｓ＝１：６

(4)　搬入系土器

Ａ．灰釉陶器（編年表５　上段）(註５)

肉眼観察による分析　古代８期からの継続として９期以降も引き続きみられる器種は、椀Ａ・皿（丸皿）・段皿の３器種である。椀Ａと皿は10期までは一定量の出土がみられ、減少しながらも12期までは確認でき

る。段皿は14期までは確認できる。13期にやや量がふえる。椀Bは近隣の遺跡で10期に初現形態のものがわずか確認でき、それ以降15期まで確認できる。13期に増大し、14期も一定量確認でき、15期はごくわずかとなる。小椀・耳皿はごく少数である。少数器種のため詳細は不明である。そのほか、稜椀がごくわずか9期と10期に確認できる。器種の消長についてまとめると、灰釉陶器の椀・皿類の主体は、11・12期を境にしてそれ以前が椀Aと皿（丸皿）であり、それ以後は椀Aが椀Bに、皿が段皿にそれぞれ明確に主体が入れ代っていく。そして、14期までは食膳具のなかで、多くはないが一定量をしめ、15期には急激に出土数が減少する。

各器種における変化の大要は、椀Aと皿では古代8期後半にはハケぬりとつけがけの両者が存在するがつけがけの方が多く、9期以降はつけがけが主体をしめる。椀Aでつけがけの器形は、形態が多様で形態のみでは時期を特定することはむずかしい。ただし、椀Aと皿で、内面見込部分を非常にていねいにコテ状工具で整形する例は古い様相のものといえる。また、口縁端部を曲げて調整する例は古い様相のものに多く、まっすぐにのばすものは新しい様相に多い。しかし、単品での出土が多い善光寺平の場合、これらのみで時期を決めることは慎重でありたい。椀Bは、出現期は底径に比べて口径が広く、大きくななめ上方に開く形態をとる。12期のものは、高台径が広く（8.0cm以上も多い）、腰部に張りをもち上方へ開く形態をとる。口径は16.0cm以上の大形のものや、口径は16.0cm以下でも高台径が広く、大形の器形と相似形の形態となるものが多い。13期には12期にみられる形態もわずか残るが、腰部に張りをもち上方へ開く形態を引き継ぎながら高台径が小さくなり、口径も16.0cm以下となる。14期には、13期の器形もわずか残るが多くは高台が斜め外側に引き出される形態に変化し、腰のはりもやや弱まり器高もやや減少する。15期は、資料数が少なくはっきりとしない。段皿は、口径が著しく減少する方向で変化する。12期には13.0cm前後以上のものがほとんどだが、13期には11.0cm～13.0cm以下となり14期にはさらに減少して、9cm台～10.0cm前後程にもなってしまう。生産地は東濃産が多い。

若尾正成氏の型式観（若尾1987・1988）から、今回出土した屋代遺跡群の資料を近隣の遺跡の例を参考にしながらみてみると、型式の変遷はおおむね図90のようになる。古代7期後半～8期前半はハケぬりの施釉法を特徴とする器種が多い。8期後半～9期はつけがけの大原2号窯式が主体になるが、ハケぬりを主

◎……多い　○……一定量あり　△……少ない

	窯式	6期	7期前半	7期後半	8期前半	8期後半	9期	10期	11期	12期	13期	14期	15期	
猿投	黒笹14号窯式	○	○	○	△									食膳具ハケぬり主体
猿投	黒笹90号窯式	○	○	◎	◎	?								食膳具ハケぬり主体
尾北	篠岡4号窯式			◎	◎	?								食膳具ハケぬり主体
東濃	光ヶ丘1号窯式			◎	◎	△	△							食膳具ハケぬり主体
東濃	大原2号窯式				○	◎	◎	○	△					食膳具つけがけ主体
東濃	虎渓山1号窯式							○	○	◎	△			食膳具つけがけ主体
東濃	丸石2号窯式									△	◎	○		食膳具つけがけ主体
東濃	明和27号窯式										△	◎	?	食膳具つけがけ主体
東濃	西坂1号窯式												△	食膳具つけがけ主体
	古代	9C第2四半期	9C中ごろ	9C後半		9C末	10C前半	10C中ごろ	10C後半		10C末～11C初頭	11C前半	11C後半	

888年
（仁和の洪水）

図90　灰釉陶器の時期的変化

とする光ヶ丘１号窯式や、口径13.0cm前後以下のハケぬりの皿も存在する。10期～11期はつけがけが主体で、大原２号窯式と虎渓山１号窯式が入り混じった様相をみせ、どちらの型式のものか断定しずらいものも多い。12期には虎渓山１号窯式が多くなり、13期には明確に丸石２号窯式が主体になる。そして、14期には明和27号窯式（以前大原10号窯式と呼ばれていた）に明確に主体が変化する。次の15期は灰釉陶器の出土が少なくなるので明確にはわからないが、１例のみ西坂１号窯式を伴う例がみられている。

胎土分析による産地の推定と各産地の特徴　屋代遺跡群からは、古代６期～15期までの遺構に伴って図のとれる個体で200点以上の灰釉陶器が出土した。これらの産地をより明確につかむために、まず肉眼観察でこれらの灰釉陶器をいくつかのタイプに分類し、それぞれのタイプから代表的な個体を選び出して胎土分析を行うことにした。表83は、胎土と釉調により灰釉陶器を分類したものである。肉眼での観察で産地が把握できたものは表中に書き入れてある。尾北窯と静ヶ谷窯（静岡県）の推定については斎藤孝正氏にご指導を受けた。分析を行った個体については、表中に「胎土分析No」で示し、器種、出土遺構、時期を併記した。合計30点である。この30点の実測図は図91に提示した。分析は(株)第四紀地質研究所（所長井上　巌氏）に委託し、「Ｘ線回折試験」と「化学分析」という２通りの方法で行った。「Ｘ線回折試験」では「石英（Qt）―斜長石（Pl）」の相関について分析し、「化学分析」では、「SiO_2―Al_2O_3」「Fe_2O_3―MgO」「K_2O―CaO」のそれぞれの相関について分析した。産地の比較資料は、(株)第四紀地質研究所の持つデータで行った。

この分析内容と結果の詳細は、第11章第４節に掲載した。結果（表84）を要約すると東濃系とその他の産地との違いはSiO_2の多少で分離でき（少は東濃系、多はその他）、その他のタイプはMgOの多少によって尾北系と産地不明に分離できる。（少は尾北系、多は産地不明）。なお、この産地不明のものは他の成分も連動した値を示している。この分析結果を、肉眼観察の結果とともに表83の右端へ「胎土分析による産地」として示した。一部に肉眼観察での産地名と異なる場合もあるが、大きな傾向は肉眼観察結果と一致するとみて良い。異なる部分については、今後の課題となろう。

以下に、この胎土分析によって明確になった産地の特徴について気づいた点を箇条書きしておく。

ア　東濃系の灰釉陶器の特徴は、胎土が非常に緻密で、土器どおしが触れあうとかん高い接触音を発するような硬質なタイプ（A類）は、他の産地にない特徴としてまずあげられる。釉調も、薄くくすんだ青

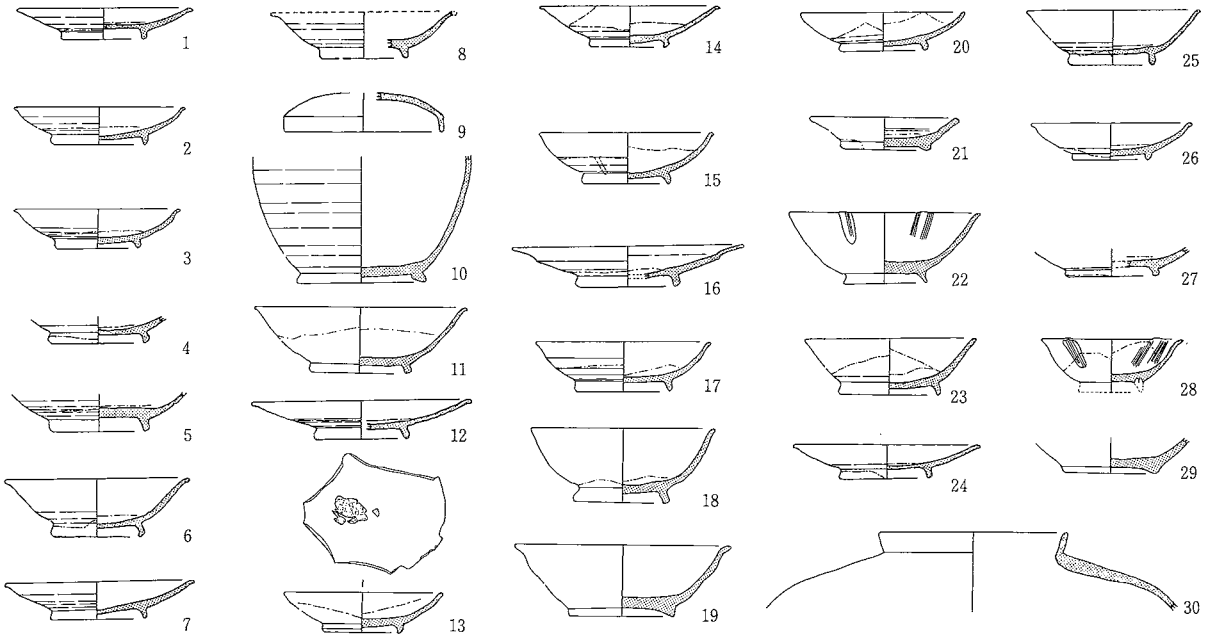


図91　灰釉陶器　胎土分析遺物の実側図　　S＝1：6

表83　肉眼観察による灰釉陶器の分析

分類		胎土 素地土	胎土 鉱物	胎土 色	胎土 その他	釉調	肉眼観察による産地の推定	胎土分析No	器種	出土遺構	時期(古代)	胎土分析による産地
A類	A-1類	・非常に緻密 ・断面がざらついた感じがしない	・黒と白の非常に小さい鉱物が多く含まれる ・白い鉱物の含有率が黒い鉱物よりも多い	・灰色系のものが多い	・非常に硬質で磁器のような硬い手ざわりをもつ ・土器どおしが触れあうとかん高い接触音を発する	・うすい明オリーブ灰色(2.5GY7/1～5GY7/1)がまだらにはいる ・白いまだら模様がうきでるものも多い ・発色しないため透明のみのものもみられる。 ・瓶類には、きれいな緑色となるものがみられる	東濃	12	Ⅲ	SB4809-5	7期後半	東濃系
								13	Ⅲ	SB1002-12	9期	
								28	小椀	SB1-18	14期	
								9	蓋	ST3001-13 盛土	8期前半	
	A-2類	同上	・黒と白の非常に小さい鉱物が少なめに含まれる	同上	同上			14	Ⅲ	SB9050-28	8期前半	東濃系
								15	Ⅲ	SB809-7	10期	
B類	B-1類	・荒め ・断面はざらついた感じをうける	・黒と白の非常に小さい鉱物がやや多めに含まれる ・白い鉱物の含有率が黒い鉱物よりも多い	・灰色系のものが多い ・なまやけのものも散見		同上		20	Ⅲ	SB9082-4	8期後半～9期	東濃系
								22	椀B	SB18-7	15期	
								5	椀A	SB55-6	8期前半	尾北系？
								8	小椀	SB4206	8期前半	尾北系
								21	段Ⅲ	SD1008-1	13～14期	
	B-2類	同上	・黒と白の非常に小さい鉱物が少なめに含まれる	同上				17	椀A	SB825-8	9期	東濃系
								19	椀B	SB9045-1	15期	
								16	段Ⅲ	SB41-20	8期前半	不明
								18	椀B	SB4503-3	13～14期	尾北系
C類		同上	同上	・黄色味をおびた胎土が特徴的（ややわらかみがある） ・灰色系のものもある（上記にくらべてやや硬い）		・白濁系 ・青白系 ・うすい緑に白がまじった釉調	尾北	1	Ⅲ	ST3001-19	8期前半	尾北系
								2	Ⅲ	SB827-11	9期	
								3	Ⅲ	SB826-20	9期	
D類		同上	・黒と白の鉱物が大きいものから非常に小さいものまで多量に含まれる ・黒い鉱物のほうが白よりも多い	・白味の強い灰白色系 ・時期が新しくなるとくすんだ色あいのものが増え、黄色味をおびたり、灰色系のつよい灰白色系のものがみられる		・オリーブ灰色 ・(10Y6/2～7/2)	猿投	6	椀A	SD906-4	6～7期	猿投系？
								29	椀	SK4600-2	中世	
								11	椀A	SB9029-7	9期	不明
E類		同上	・黒と白の鉱物が大きいものから非常に小さいものまで多めに含まれる ・直径1mm以上の岩石・鉱物も含まれる	・暗っぽい灰色系またはおうど色系		・灰オリーブ(7.5Y6/2前後、D類よりやや黄色味が強い) ・白いまだらもようや透明な釉、さらに白色のみの釉はみられない	不明	25	椀A	SD287-8	8期前半	東濃系
								23	椀A	SB9079-3	7期	不明
								24	Ⅲ	SB6007-3	7期後半	
								26	Ⅲ	SB1002-13	9期	
その他	胎土は黄色味をおび尾北的、釉調は白色系主体でまだらにならないオリーブ灰系がはいる							4	椀A	SD273-8	7期後半～8期前半	不明
	胎土は白味の強い灰白色系、釉調は猿投に似る、黒い鉱物がやや多めにはいる点も猿投に似る							10	瓶類の底	SB832-3	9期	
	胎土はくすんだ色あいだが、釉調とともに猿投に似る、黒い鉱物の含有量は少なめ							27	Ⅲ	SB76-5	8期前半	
	胎土は黄色味をおび尾北でもいい、しかしくすんだ色あいとみれば黒い鉱物も多めに含まれるため猿投にも似る、無施釉							7	Ⅲ	SB119-4	7期	尾北系
	胎土は荒め、断面はざらついた感じをうける、あざやかな緑の釉調、表面に黒いぽつぽつ（硫化鉄）がふき出る							30	短頸壺	SB67-11	7期前半	静ケ谷

緑色がまだらにはいったものや、白いまだら模様が浮き出るものも多い。また、発色しないため透明のみのものもみられる（A類・B類）。この釉調も他の産地ではあまりみられない。胎土では、非常に小さい黒や白の鉱物が多くふくまれるもの（A-１類・B-１類）、ふくまれないもの（A-２類・B-２類）等様々であるが白い鉱物が多めなのが特徴的である（猿投系は黒い鉱物が多い）。

イ　東濃系の同一の個体で、体部はA類であるのに底部や高台部がB-１類やB-２類というものが複数あることから（SB51-11、SB4030-10、SB9043-16）、A類とB類の産地が同じであるということは肉眼観察の中からもうなずける。

ウ　尾北系の灰釉陶器（C類）では、胎土が黄色味をおびたものである点は他の産地と分離できる特徴である。また釉薬も白濁系や青白色系の釉調でうすい緑に白が混じった感じのものもみられる。今回の分析で東濃系であろうと考えたB類の中に尾北系とされるものが数点みられた。分析結果をうけて再度観察したところ、尾北系とされたものの釉調は白濁系であり、白色がまだらにはならない点で共通性があり、白色がまだらとなる東濃系の釉調の特徴とは違う点がわかった。これらが尾北系のものとすると古代10期以降はないだろうと考えられた尾北からの供給が13～14期にもあったことになる。

エ　猿投系の灰釉陶器（D類）は、胎土に黒と白の鉱物が多量に含まれており、黒い鉱物が多くみられる点が特徴的といえる。９世紀中頃の段階では胎土は灰白色系だが、時期が新しくなるにつれてくすんだ色合いのものが増えてくる。釉調は深みのある青緑色でこれも特徴的なものである。分析No11は、釉調はやや透明感があるものの胎土の特徴は猿投的であるが、分析結果は猿投の領域に入らなかった。

表84　灰釉陶器胎土分析結果（要約）

分析NO	器種	出土遺構	時期	分析結果	SiO_2	MgO
9	蓋	ST3001-13　盛土	古代８期前半	東濃系	少	多
12	皿	SB4809-5	古代７期後半	東濃系	少	多
13	皿	SB1002-12	古代９期	東濃系	少	多
14	皿	SB9050-28	古代８期前半	東濃系	少	多
15	皿	SB809-7	古代10期	東濃系	少	多
17	椀A	SB825-8	古代９期	東濃系	少	多
19	椀B	SB9045	古代15期	東濃系	少	多
20	皿	SB9082-4	古代８期後半～９期	東濃系	少	多
22	椀B	SB18-7	古代15期	東濃系	少	多
25	椀A	SD287-8	古代８期前半	東濃系	少	多
28	小椀	SB1-18	古代14期	東濃系	少	多
4	椀A	SD273-8	古代７期後半～８期前半	在所不明	多	多
10	瓶類の底	SB832-3	古代９期	在所不明	多	多
11	椀A	SB9029-7	古代９期	在所不明	多	多
16	段皿	SB41-20（SB8とも接合）	古代８期前半	在所不明	多	多
23	椀A	SB9079-3	古代７期	在所不明	多	多
24	皿	SB6007-3	古代７期後半	在所不明	多	多
26	皿	SB1002-13	古代９期	在所不明	多	多
27	皿	SB76-5	古代８期前半	在所不明	多	多
6	椀A	SD906-4	古代６～７期	猿投系？	多	多
29	椀	SK4600-2（図版275）	古代15期	猿投系？	多	多
1	皿	ST3001-19	古代８期前半	尾北系	多	少
2	皿	SB827-11	古代９期	尾北系	多	少
3	皿	SB826-20	古代９期	尾北系	多	少
7	皿	SB119-4	古代７期	尾北系	多	少
8	小椀	SB4206（図版にはなし）	古代８期前半	尾北系	多	少
18	椀B	SB4503-3	古代13～14期	尾北系	多	少
21	段皿	SD1008-1	古代13～14期	尾北系	多	少
5	椀A	SB55-6	古代８期前半	尾北系？	少	少
30	短頸壺	SB67	古代７期前半	清ヶ谷	少	少

オ　産地不明の灰釉陶器は、分析結果が連動している個体である。その中でE類としたものは、黒っぽい灰色系の胎土が特徴で、鉱物も多く含まれ、更に直径1㎜以上の岩石・鉱物も含まれる。これらと分析No10・16・27としたものは、産地は不明であるが釉調は猿投と似ており、胎土は東濃的である。

カ　分析8は、重ね焼き痕はみられるものの内面は全面施釉されており、外面は全く施釉されていない。高台は三日月高台であるため、型式的には猿投の黒笹90号窯式1段階である。しかし、胎土分析では産地は尾北である。現状ではこういった型式のものは猿投以外で確認されていないため、問題を投じる一例となろう。

キ　静ヶ谷窯とされる分析No30は、分析結果からも確認でき静岡県からの搬入がより明確となった。胎土は須恵器的である。

以上、長野県内への搬入先は『古代1編』ならびに本項前段で述べたとおりだが、それらがこの分析結果からも補強されたかたちとなった。

なお、これらのデータはすべて(財)長野県文化振興事業団が保管している。

表85　緑釉陶器一覧表（古代2関係）

No	図版No	掲載No	遺跡名	出土遺構・層位	時期	器種	分類	産地	巻頭図版	備考	緑釉番号
1			更埴条里	SB861　覆土中層	8期後半	皿	e-1類	猿投系	3-26		44
2			更埴条里	SB808	9期	小片	x類	?	3-34	内外面ミガキなし	59
3	116	13	更埴条里	SB827　カマド内	9期	皿	a-1類	猿投系	3-4		60
4	116	12	更埴条里	SB827	9期	輪花椀	x類	?	3-33		61
5			更埴条里	SB828	9期	小片				現物不明	62
6			更埴条里	SB843　カマド脇	9期	輪花椀	a-1類	猿投系	3-11		63
7	120	3	更埴条里	SB851　カマド周辺	9期	椀(4片)	a-1類	猿投系	3-10・15・18・19	同一個体	64～67
8	121	14	更埴条里	SB852	9期	椀	a-1類	猿投系	3-7	緑釉緑彩陶	68
9			更埴条里	SB9025	9期	椀?				現物不明	69
10	129	7	更埴条里	SB9038　床	9期	椀	a-1類	猿投系	3-6		70
11			更埴条里	SD857	9期	小片	a-1類				88～89
12			更埴条里	SD857	9期	小片	d-1類				90～92
13			更埴条里	SD857	9期	小片	e-1類				93
14	142	2	更埴条里	SD707	9～10期	皿	a-3類	京都(洛西系)	3-20		71
15			更埴条里	SD707	9～10期	小片	a-1類	猿投系	3-16		72
16			更埴条里	SD707	9～10期	皿	e-2類	東濃系	3-31		73
17			更埴条里	SD703	9期前後	小片	a-1類	猿投系			74
18	113	20	更埴条里	SB806　覆土下層	10期	皿	a-1類	猿投系	3-9		77
19	113	23	更埴条里	SB806　カマド周辺	10期	皿	a-3類	京都(洛西系)	3-21		78
20			更埴条里	SB806　床下	10期	椀	a-1類?	猿投系			79
21			更埴条里	SB809	10期	椀	d-2類	尾北系	3-24	緑釉緑彩陶	80
22			更埴条里	SB809	10期	皿	a-1類	猿投系	3-5		81
23			更埴条里	SB809　掘方	10期	輪花椀	a-1類	猿投系	3-12		82
24			更埴条里	SB9032	10～12期	皿	e-1類	猿投系	3-27		83
25	143	2	更埴条里	SD1008	13～14期	椀	d-1類	尾北系	3-25		84
26			更埴条里	SD815	近現代への混入	小片	d-1類	尾北系			86
27			更埴条里	SD873	8期以降	皿	a-2類	尾北系			47
28			更埴条里	SD874	近現代への混入	皿	a-1類	猿投系			85
29			更埴条里	SD941	不明	小片(椀)	a-1類				94
30			更埴条里	SD949	9期以降	小椀	f類	近江系	3-32		75
31			屋代	SD24	中世	小片	a-3類?				87
32			更埴条里	H地区　II層	8期以降	皿	a-1類	猿投系			50
33			更埴条里	H地区　III層	8期以降	椀	a-1類	猿投系	3-3		51
34			更埴条里	I地区　XIO15　III層	9～10世紀	小片	d-1類	尾北系	3-23		37
35	146	2	更埴条里	I地区　P　III層	9世紀以降	椀	d-1類	尾北系	3-22		45
36	146	4	更埴条里	I地区　XPI09　III層	9世紀以降	椀	e-1類	猿投系	3-28		46
37	146	1	更埴条里	I地区　III層	8期以降	椀	e-1類	猿投系	3-30		48
38	146	3	更埴条里	I地区　III層	8期以降	皿	a-1類	猿投系	3-2		49
39			更埴条里	I地区　III層	8期以降	皿	a-1類	猿投系			52
40			更埴条里	I地区　III層	8期以降	椀底部(2片)	a-1類	猿投系	3-8・13・14		53～56
41			更埴条里	I地区　XIK9　III層	8期以降	皿	e-1類	猿投系	3-29		57
42			更埴条里	J地区　III層	8期以降	小片	a-1類	猿投系	3-17		58
43			屋代	①g区　IV-1層	9世紀以降	椀	x類	?		白釉か、39と同一か	40
44			屋代	②b区　カクラン	9世紀以降	椀	a-1類	猿投系			41
45			屋代	VIIIKD13　IV-1層上面	9世紀以降	椀	x類	?		白釉か、40と同一か	39
46			屋代	VIIT2　IV-1層上面	9世紀以降	椀	a-1類	猿投系			42
47			屋代	VIIT6　カクラン	9～10世紀	椀	a-1類	猿投系			38
48			屋代	I区　SP4	9世紀以降	小片	o類	京都(洛北系)	3-1	口縁部に緑彩斑文	43

分類		胎土	釉 色調	釉 ツヤ	釉 釉着	釉 施釉部位	釉 施釉	技法	高台	産地（井上氏による）		他の報告とのおおまかな対応 吉田川西	他の報告とのおおまかな対応 松本平総論編	備考（類例）
o類		灰白色または灰黄色系 軟質	黄色味の強い or 淡黄緑色 淡黄緑色 a類より黄色味が強い	有	良 はげやすいものも多い	全	均一に施釉	器面全体をヘラミガキ	無高台平低が多い	京都系（洛北系）			A類	下神遺跡SB100-18 下神遺跡区画溝Ⅰ-17
a類	a-1類	灰白色～灰色系 明かるめ やや硬質～硬質	淡緑色 or 淡黄緑色	有	良	全	均一に安定的に施釉	器面全体をヘラミガキ	短いものが多い（ていねいにナデ整形）	猿投系	その他	a類	B類	吉田川西遺跡SB94-36 吉田川西遺跡SK202-5
	a-2類	灰色系 暗め 硬質　須恵器的	緑色						長いものが多い（ていねいにナデ整形）	尾北系				
	a-3類		淡緑色						ヘラで整形したあとが残る	京都系（洛西系）				
b類		灰白色系 やや硬質～硬質	淡緑色 or 淡黄緑色	有	良	全	均一に安定的に施釉	ヘラミガキあるがない部分もみられる（特に外面）		猿投系	その他	b類		吉田川西遺跡SB148-3
c類		薄い青灰色系 硬質　須恵器的	緑色 or 濃緑色	無	はげやすい	全	ムラあり（まだら）	ヘラミガキほとんどなし		東濃系か？	その他	c類	D類の一部	屋代遺跡群では未確認 吉田川西遺跡SD17-62 吉田川西遺跡SD118-19 松本市堀の内遺跡４号住
d類	d-1類	暗青灰色系 暗め 硬質　須恵器的	濃緑色	有	良	全	均一に安定的に施釉	全面ヘラミガキ		尾北系	その他	d類	C類	北栗遺跡SB196-6
	d-2類						ムラあり（まだら）			東濃系か？				屋代遺跡群では未確認 吉田川西遺跡SD118-17 吉田川西遺跡SB32-332
e類	e-1類	白色～灰白色系 軟質	淡緑色 or 緑色	有	良 はげやすいもの多い	全	均一に安定的に施釉	全面ヘラミガキ		猿投系	その他	e類	E類	
	e-2類		濃緑色 or 緑色				ムラあり（まだら）	ヘラミガキほとんどなし		東濃系か？				吉田川西遺跡SB120-23 吉田川遺跡SB32-326
f類		暗青灰色系 暗い 硬質　須恵器的	濃緑色	有	良 風化して表面がブツブツひかる（銀化現象）	低部は無釉	ムラあり（まだら）	ヘラミガキほとんどなし	内側に段がつく	近江系	その他	f類	D類の一部	吉田川西遺跡SK128
x類		上記以外								不明		g類 x類		

cf　他報告との対応は、実物をみて判断したため定義内容面では異なったとらえになっているものもある

図92　緑釉陶器の分類

B．緑釉陶器

今回報告分に該当する古代８期後半以降のものは、総数48点（屋代遺跡群７点、更埴条里遺跡41点）である（表85）。『古代１編』刊行後整理途中で新たに発見された「古代編」対象のものもこの中に含めて報告する。出土した緑釉陶器を胎土・釉調・技法等により分類した（図92　巻頭図版３）。分類の方法については『古代１編』に準じている。産地については、井上喜久男氏に実見していただいた結果を記載した。分類はされているが産地名の記載がないものは井上氏にみていただいていないものである[註6]。これにもとづいて８期以降の考察をする。

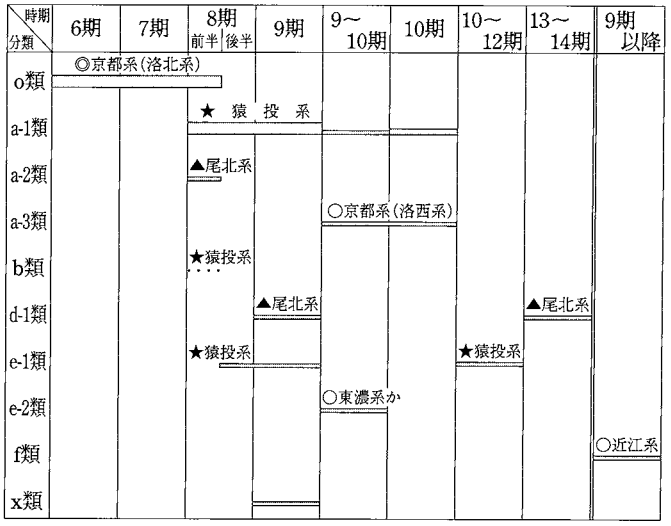


図93　緑釉陶器の消長

緑釉陶器の消長をまとめたものが図93である。これによると出現期の古代６期から７期までは京都系（洛北系）のｏ類がほとんどを占めていたが、８期から新たに猿投系、尾北系といった尾張に生産地をもつ緑釉陶器が搬入され始める。主体になるのは猿投系のａ－１類であり、以後ａ－１類は緑釉陶器の主体を占める。他に８期では、猿投系のｂ類や、ｅ－１類、そして尾北系のａ－２類も少数ながら確認できる。９期

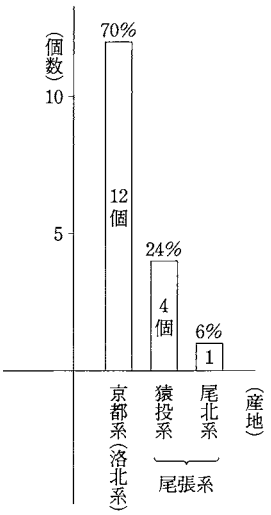


図94　緑釉陶器　古代6期～8期前半の産地別割合

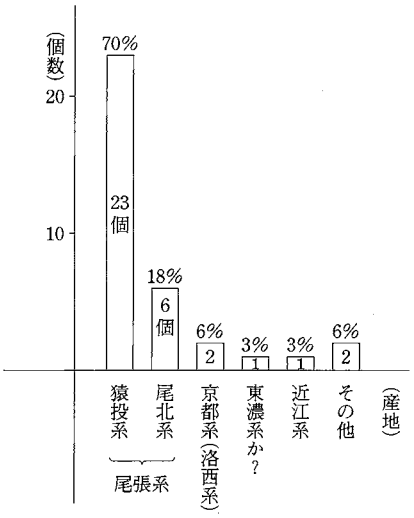


図95　緑釉陶器　古代8期後半以降の産地別割合

以降、量は少ないものの近江系（f類）、東濃系（e－2類）、京都系（洛西系、a－3類）といった新たな地域の搬入品もみられ始め、更に搬入先が増加傾向をみせる。10期まで出土量は多い。それ以降減少に転じ、13～14期までわずかに出土例がみられる。井上氏に実見していただいた産地別の割合を9世紀末である8期の前半と後半をさかいにグラフ化すると、図94と図95のようになる。8期前半まで京都系（洛北系）が主体をしめ、8期後半以降、猿投系を中心とした尾張系に主体が転換する様子がよく理解できる。多様な搬入先がみられるのも8期後半以降の特徴といえよう。なお、9期のSB852の掘方から緑釉緑彩陶が出土している（図96）。

SB852　掘方－14

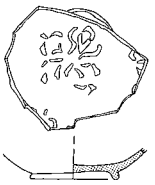


図96　更埴条里遺跡出土の緑釉緑彩陶　S＝1：6

C．輸入陶磁器（編年表5　上段）

古代9期～15期の間にみられる輸入陶磁器は、白磁と越州窯系青磁の2種類である（図97）。白磁は椀・皿類で15期からみられ始め、12世紀代も引き続きみられる。越州窯系青磁は9期のSB843から良好な出土がみられる。高台は蛇の目高台で畳付部分は露胎だが、他は全面にオリーブ灰色の発色の良い釉が施釉されている。胎土は密で精良。外底重ね部分には重ね焼き用の灰白色の目跡が4ヶ所確認できる（推定は6ヶ所）。しかし、内面には目跡はない。外底部に目跡が残ることは問題を残すがその他の特徴は横田・森田分類（横田・森田1978）のⅠ類に属するものと考えられる。他にSB4809からも小片で2片の出土がみられる。古代7期後半の遺構であるが小片であるため、混入の可能性も考え今回報告した（巻頭図版4）。

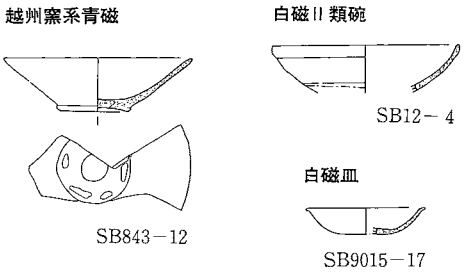


図97　更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土の輸入陶磁器　S＝1：6

(5)　食膳具の変遷

以上、各器種ごとに変化と消長について述べてきたが、それらを整理したのが編年表5である。それを参照しながらここでは食膳具全体の各期の特徴を簡単に述べる。また、図98～99に古代8期後半～15期までの食膳具を集成した。

古代9期

食膳具の主体は、黒色土器から土師器に転換する。主体をしめる器種は口径平均が12cm台の土師器杯AⅡで、これを中心にして椀類と皿類が一定量加わり食膳具が構成される。椀類、皿類共に土師器、黒色土器A、黒色土器B、灰釉陶器、緑釉陶器にみられる。黒色土器A杯Aは、頭初は多く組成に入るものの減少傾向が著しい。その他の器種として少数だが土師器と黒色土器に盤BⅠ、土師器に高盤がみられる。8期には存在していた器種の多くは、数をへらしながらも存在するものが多い。須恵器杯A、須恵器皿A、軟質須恵器杯A、須恵器鉢A等は基本的には組成に加わらない。灰釉陶器は、多くは東濃産となり大原2号窯式が主体となる。緑釉陶器は、8期までの京都系（洛北系）のo類がみられなくなり、猿投系を中心

に尾北系も含めた尾張系が主体となり一定量搬入される。輸入陶磁器では越州窯系青磁の搬入もごくわずかみられる。

古代10期～11期

古代10期には黒色土器Ａ杯Ａが激減し非常に少なくなる。更に、土師器皿ＡⅡや土師器鉢Ｂ、黒色土器Ａ鉢Ｂは消滅するといった小さな変化はあるものの、食膳具の基本的なあり方は杯Ａを中心に椀・皿類を含めて構成される９期のあり方を継承している。杯Ａは土師器が中心で、椀・皿類は土師器、黒色土器Ａ、黒色土器Ｂ、灰釉陶器、緑釉陶器と多様である。土師器杯ＡⅡは口径が減少し、10期には平均11cm台に、11期には平均10cm台にまで縮小する。灰釉陶器は大原２号窯式や虎渓山１号窯式が中心となる。緑釉陶器は11期以降減少する。

古代12期～13期

古代12期に土師器杯Ａの大小の２法量分化が顕著となり杯Ａは、杯ＡⅡと杯ＡⅢで構成される。主体をしめるのは杯ＡⅢである。食膳具構成のあり方は前段階と同じで、杯を主体に椀と皿で構成される。土師器杯Ａが２法量に顕著に分化した分、多様性はやや増すといえる。土師器杯ＡⅢの法量の縮小傾向は更に進み、器高が著しく減少する。12期には器高平均で2.9cm～3.0cm強だったものが、13期には平均で2.6cm～2.8cmに減少する。灰釉陶器は椀類と皿類の構成にはかわりないが、器種が椀類では椀Ａ主体から椀Ｂ主体になり、皿類では皿（丸皿）主体から段皿主体へと交代する。12期には虎渓山１号窯式が13期には丸石２号窯式が多くみられる。緑釉陶器の出土量は著しく減少する。

古代14期～15期

土師器杯ＡⅢの器高の縮小傾向はさらに進み、古代14期では器高平均で2.1cm～2.5cmに、更に15期では2.1cm未満になってしまう。ここまで器高が縮少すると、杯と呼ぶより皿と呼ぶ方が形態的には適している。この土師器杯ＡⅢの器高の減少により食膳具構成は、従来から中心をしめていた杯型土器が、少数の土師器杯ＡⅡ・Ⅰと黒色土器Ａ杯Ａのみになり、椀と皿を中心としたものにわずかに杯が加わるという形に移行する。この食膳具のあり方は中世的な食膳具様式により近い形態となる。ただし、中世的なあり方と違う点は、杯型土器がわずかにある点と食膳具の大量廃棄が未だ一般的に行われている点である。灰釉陶器では丸石２号窯式と明和27号窯式が主にみられるが、特に14期には明和27号窯式が明瞭に伴う。15期には緑釉陶器は出土せず灰釉陶器の出土量は減少する。これに代わって白磁の椀、皿類が出土するようになる。

以上、古代９期～15期までの食膳具の変遷をみてきたが、この間に２つの画期を見ることができる。１つは８期の中で始まり８期と９期の境をもって完結する画期である。この時期は、古代１期後半に確立した歴史時代的須恵器を主体とした金属器指向型の食膳具構成がすべて消滅し、古代６期に椀・皿類の登場をもって開始された磁器指向型の食膳具構成が完成をみる時期である。この段階での食膳具構成は土師器、黒色土器Ａ・Ｂ、灰釉陶器、緑釉陶器がみられ、杯を主体とし、椀・皿類で補強された形をとる。時期的推移の中で、食膳具の主体が黒色土器Ａから土師器に変化したり（古代９期）、皿Ａや皿Ｂ等が消滅したり（古代10期前後）、土師器杯Ａの２法量分化が顕著にみられるようになったり（古代12期以降）といった磁器指向型の中におけるゆるやかな変化はみられるものの、古代15期まで杯、椀、皿を中心とする食膳具構成に変化はみられない。ただし、14期以降の土師器杯ＡⅢは器高の減少により杯形土器というより皿形土器と呼んだ方がいい形状となるため、14期以降は従来の杯形土器は土師器杯ＡⅡ・ＡⅠと黒色土器Ａ杯Ａのみになる。このため、食膳具構成は椀・皿類を中心として、杯形土器がそれに少量加わるといったものになり、椀・皿類を中心とした中世的食膳具様式により近い形になる。

次の２つ目の画期は古代15期の終わりにおこる。それはこの段階をもって古代の土器が消滅してしまう

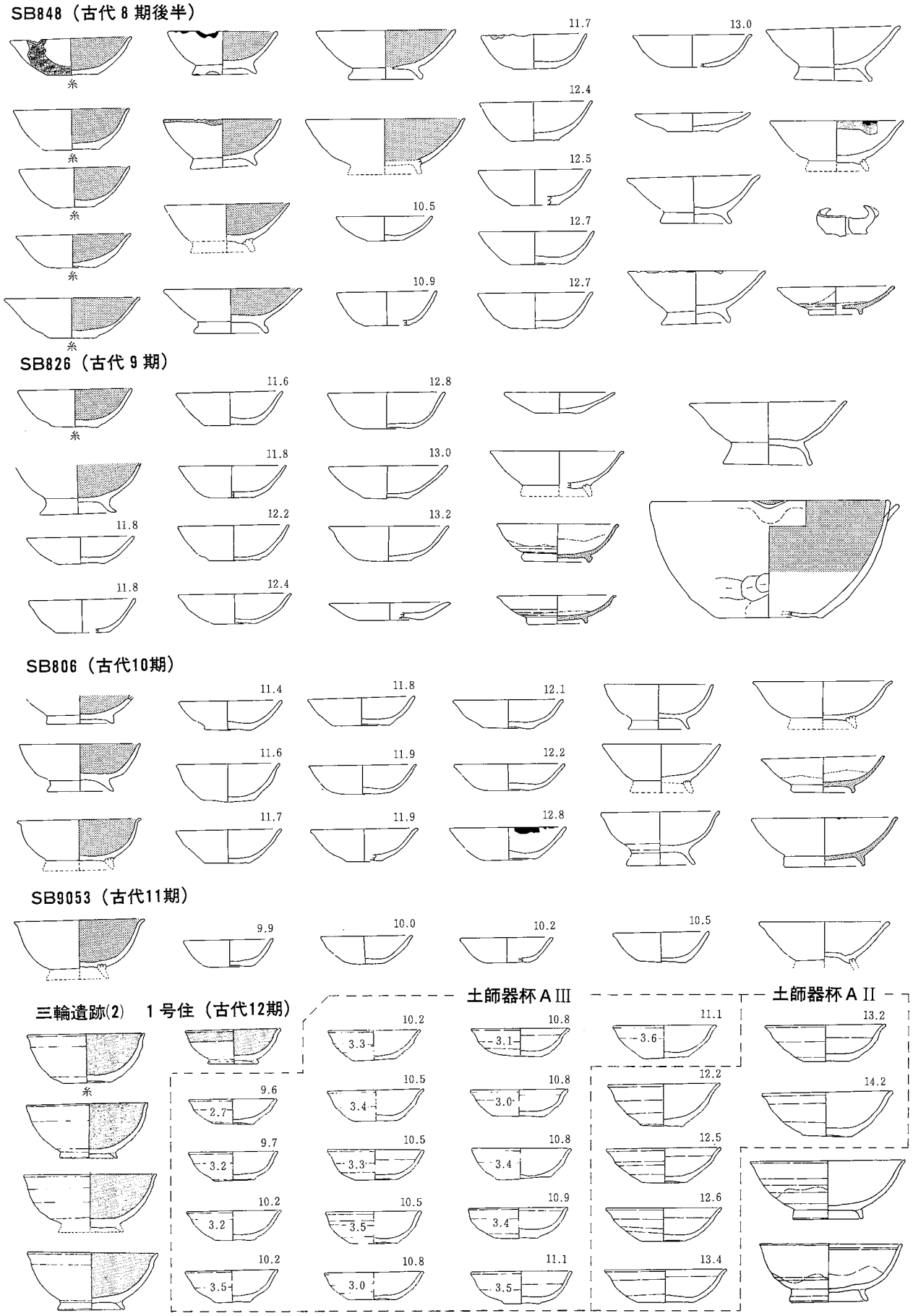
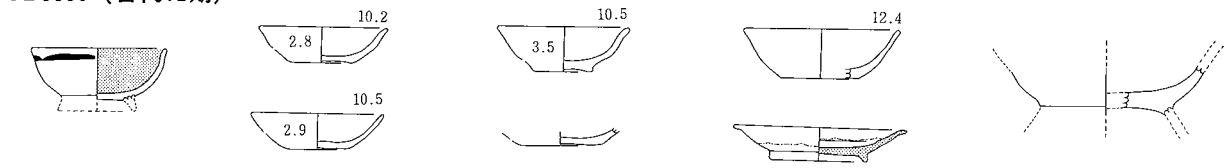
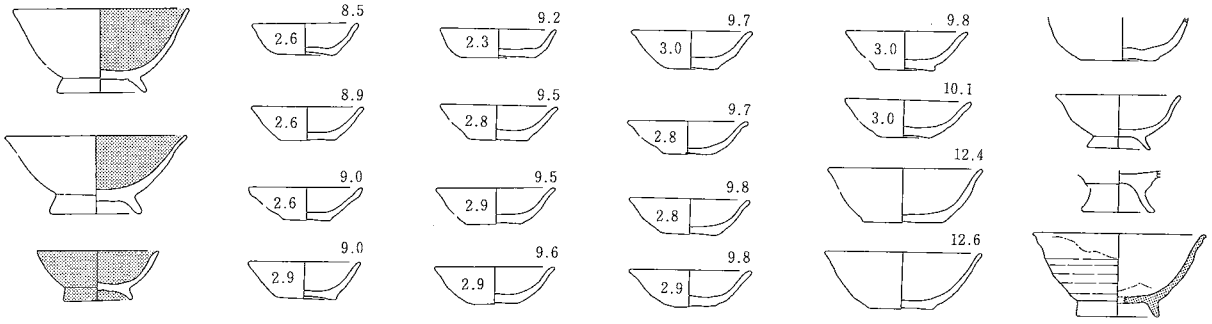


図98　古代各期の食膳具　その４　　S＝1：6

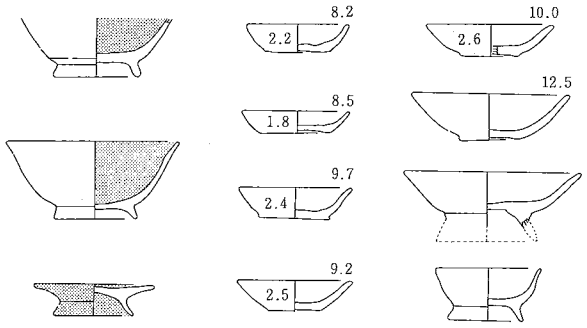
SB9035（古代12期）



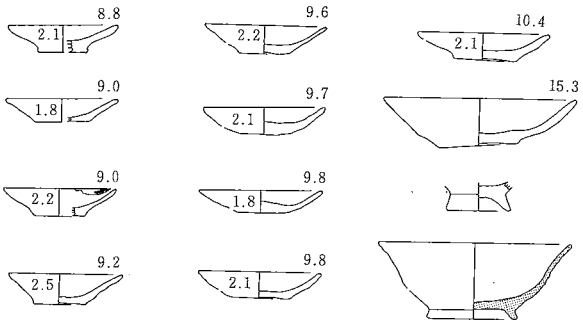
SB4004（古代13期）



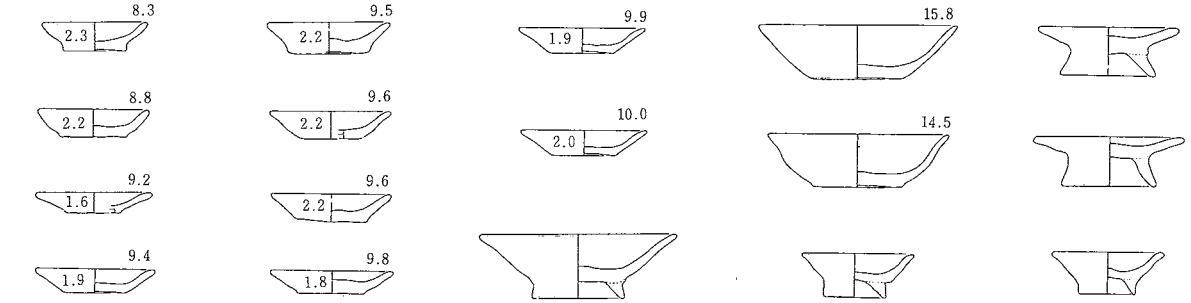
SB3027（古代14期）



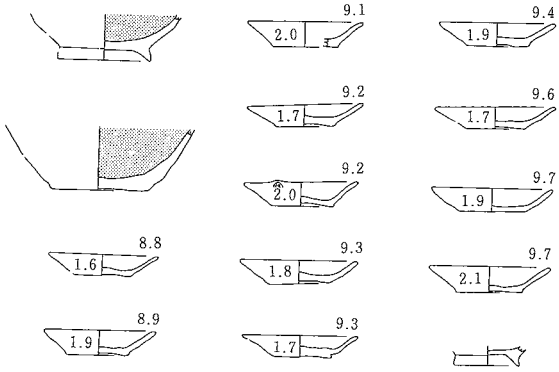
SB101（古代14期）



屋地遺跡Ⅱ　Ｂ２号住（古代15期）



SB40覆土（古代15期）



SB40カマド周辺（古代15期）

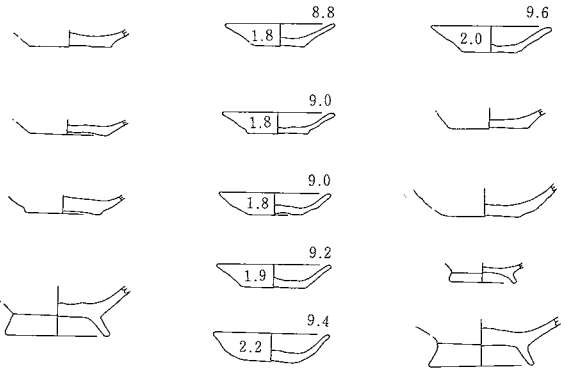


図99　古代各期の食膳具　その５　　Ｓ＝１：６

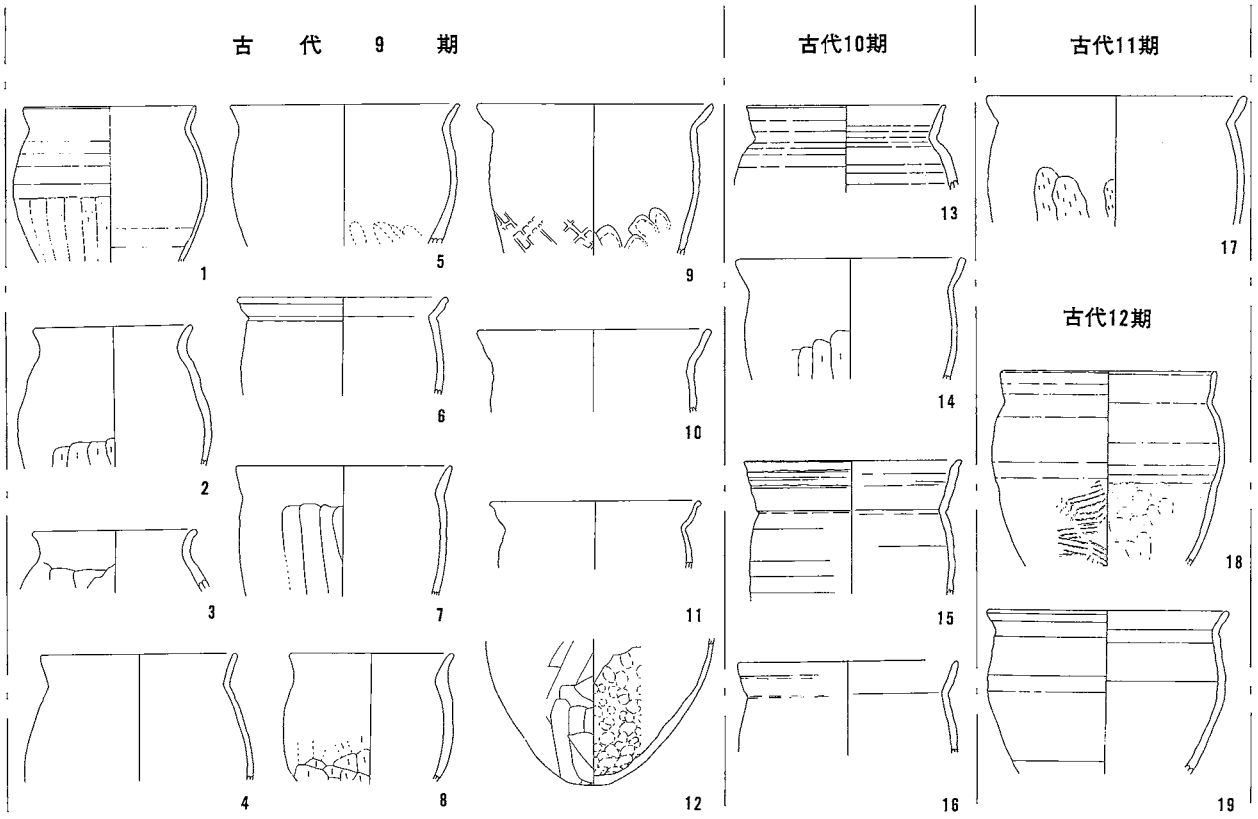
という大画期である。これ以後、輸入陶磁器の白磁や青磁の椀・皿類が食膳具の主体となる。遺物の出土量は極端に減少し、食膳具の廃棄に対する考え方も変わる。古代的な食膳具様式の終焉から中世的な食膳具様式の開始という大転換の時期といえよう。

3　煮炊具の変容

1　土師器

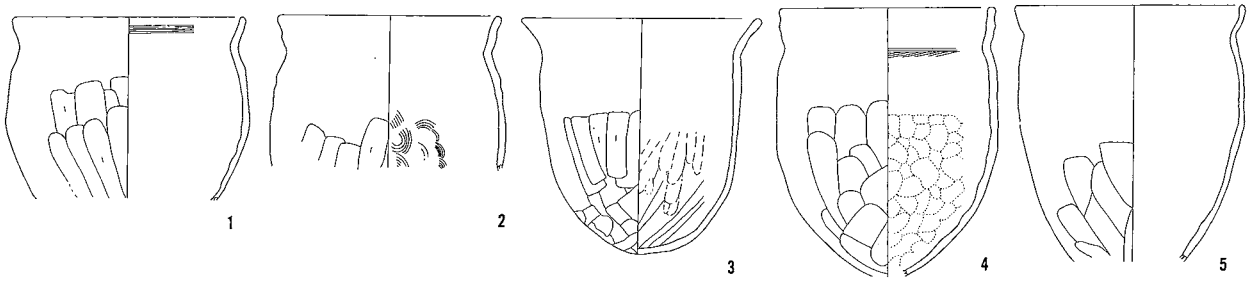
A．甕Ⅰ（砲弾甕）（編年表5　下段）

古代4期からみられた器種である。12期まで確認できる。9期、10期は量的にも多く、重要な煮炊具の位置を占める。11期から減少に転じ、12期はごくわずかみられるのみになる。屋代遺跡群と近隣の遺跡出土の9期から12期の甕Ⅰを図100に集成した。形態は定型化されたものが崩れた形で、最大径が口縁部にあるものや胴部にあるものもあり、口縁部の長さや外反の仕方、更に形態等どれをとっても非常に多様で



1　南川向3号住　4　SB1001－14　7　SB837－5　10　SB828－3　13　松原Ⅱ8号住　16　南宮14号住　19　三輪(2)1号住
2　SB826－22　5　SB808－6　8　SB826－23　11　SB843－13　14　SB9049－11　17　鶴前(高速道)SB45
3　SB827－14　6　SB852－7　9　SB843－14　12　SB9051－11　15　田中沖Ⅱ19号住　18　二ツ宮2区5号住

図100　古代9期～12期の土師器甕Ⅰ（砲弾甕）　S＝1：8



1　SB840－7　2　SB859－8　3　SB848－33　4　SB848－30　5　SB9046－12

図101　古代8期後半の土師器甕Ⅰ（砲弾甕）　S＝1：8

あることが特徴となる。ロクロ整形で体部下半を中心にケズリ調整をするタイプが多いがタタキ調整するものもみられる（図100-9、18）。参考までに８期後半の例を図101に集成した。

Ｂ．羽釜（編年表５　下段）

鍔が全周するタイプ（羽釜Ａ）と、いくつかに分かれて鍔が付けられるタイプ（羽釜Ｂ）の２つがある。直径20cm以上の大型のものと、直径10cm台の小型のものの２法量に分けられる。大型のものが多い。古代９期、10期は鍔の部分の出土はみられるが、底部まで残存する例にめぐまれず、鍔付の甑と区別がつかないため詳細は不明である。編年表５-138で８期に位置付けた例は土師器甑であった可能性もある。一般的に出土し始めるのは古代11期からである。11期、12期はまだ煮炊具として土師器甕Ｉも存在するため、遺構によって羽釜が主体の遺構もあれば甕Ｉが主体になる遺構も存在する。13期からは、煮炊具の主体は完全に羽釜に移行し、15期まで存続する。個々の形態差が大きく、単品でみた場合時期を特定することはむずかしい。

Ｃ．小型甕Ｄ（編年表５　下段）

古代９期、10期は一定量の出土が見られ小型の煮炊具の主体となる。数法量に分かれる。体部外面にロクロ目を残すものがほとんどでカキ目をもつものはごくわずかである。11期からは減少し、わずかの確認例しかみられない。近隣の遺構の例を検討してもわずかに13期までは確認できる。また、１例だが15期のSB102からロクロ調整の小型甕が出土している（編年表５-163）ため、15期まで細々と継続している可能性がある。

Ｄ．その他（編年表５　下段）

外面をハケ調整する土師器甕Ｂが古代９期のSB1004から１例のみ出土している。その他全くこれまでの分類に入れられない甕もごくわずか存在する。土師器甑は９期に３例（SB807-9、SB1001-13、SB9051-10）、14期に１例確認できた（SB1-22）。

(2)　煮炊具の変遷

以上、各器種ごとに、その変化と消長について述べてきた。それらを整理したものが編年表５である。それを参照しながら、ここでは煮炊具全体の変化を簡単に述べる。

古代９期～10期

煮炊具は、大型と小型の法量をもつものが存在し、大型の法量の主流をなす器種は土師器甕Ｉ（砲弾甕）である。ごくわずか土師器甕Ｂ（ハケ甕）もみられる。小型の法量の主流は土師器小型甕Ｄ（ロクロ小甕）である。

古代11期～12期

大型の法量をもつものとして土師器羽釜が出土例を増す。また一方で土師器甕Ｉも減少傾向にありながらも出土しており、遺構によって土師器羽釜が主流になるものも、土師器甕Ｉが主流になるものも両者が存在する。小型甕は量的には少ないが土師器小型甕Ｄが使われている。

古代13期～15期

大型の法量をもつ煮炊具は、土師器羽釜のみとなる。また小型の法量をもつものは土師器小型甕Ｄが激減するため、羽釜の中で口径20cm以下のものが使用される。煮炊具に占める土師器羽釜の比率は増大する。

以上簡単にみてきたが、古代11期と12期を移行期にして煮炊具は大きくその前半と後半の２つにわけて考えられる。前半部分は古代４期から継続してとらえられるもので、古墳時代からは全く系譜のたどれない土師器甕Ｉや土師器甕Ｃ、土師器小型甕Ｄ、土師器小型甕Ｃなどの新たな器種によって煮炊具が占めら

れた時代である。そして後半は、それらとは全く系譜のちがう土師器羽釜という器種によって煮炊具の主流が占められる時期といえる。羽釜は従来から鉄釜を模倣した器種といわれるが、鉄釜の普及が煮炊具の様相を大きく変えたといえよう。

4　貯蔵具の変容（編年表５下段）

須恵器の貯蔵具は、古代８期までは多様な器種が確認されていたが、９期以降は激減し、ごくわずかの器種がまれに出土する程度となる。須恵器甕Ａ・甕Ｃ・甕Ｄ・長頸壺Ａ・短頸壺Ｄ等が９期までわずか確認される。まれに10期の遺構に伴って出土する例もある。須恵器に代わって灰釉陶器の貯蔵具が使用されるが量的には少ない。灰釉陶器の貯蔵具は長頸壺が10期までは確認例があり、９期以降広口瓶と除々に交代していく。短頸壺もごくわずかの出土が14期まで確認できる。９期以降の貯蔵具については出土例が少ないため、詳細については不明な部分が多い。

5　実年代の比定・松本平地域との併行関係

実年代の比定　屋代遺跡群における古代の土器編年で設定した時期区分に実年代を想定すると図102のようになる。実年代の根拠となるのは、すべて灰釉陶器の年代観であり、斎藤孝正氏の1994年発表の年代観に従いつつ、私見をまじえて以下にその根拠を記す。

根拠12（古代９期の開始時期）　『古代１編』にて記述済。

根拠13（古代13期の開始時期）　古代13期には明瞭に丸石２号窯式の灰釉陶器が伴う。丸石２号窯式がいつごろから本格的に開始されるのかが、古代13期の開始年代を決定することにつながる。従来、薬師寺西僧坊床面出土の遺物は天禄４（973）年焼亡のものと考えられている。この出土遺物の中には、椀Ｂに分類される深椀が２個体みられるが、そのうちの一方（図103-3）は、口径や高台径の大きさからまちがいなく虎渓山１号窯式に比定できる遺物であり、この年代に虎渓山１号窯式がすでに開始されていたと考える根拠となっている。しかし、もう一方の深椀（図103-2）は、口径も14.3cmと小さく、器高は5.8cm、高台径も7.5cmで形態からみて、虎渓山１号窯式から丸石２号窯式に移り変わる段階に位置する大原９号窯の資料の中に類似する例をみつけることができる（図103）[註7]。従って、この薬師寺西僧坊の資料は、虎渓山１号窯式から丸石２号窯式への移行期の段階ととらえることが可能である。そして、東濃ではこの次に続く段階で虎渓山１号窯式の特徴をもつ個体はなくなり完全に丸石２号窯式の特徴をもつ窯となる。このことから、973年には虎渓山１号窯式に一般的にみられる深椀のほかに、すでに丸石２号窯式への移行期のものと考えられる深椀も生産が開始されていたととらえることができ、次の段階に移行するのに30年はかからないと考えることから、完全に丸石２号窯式に移行するのは10世紀の末ととらえる

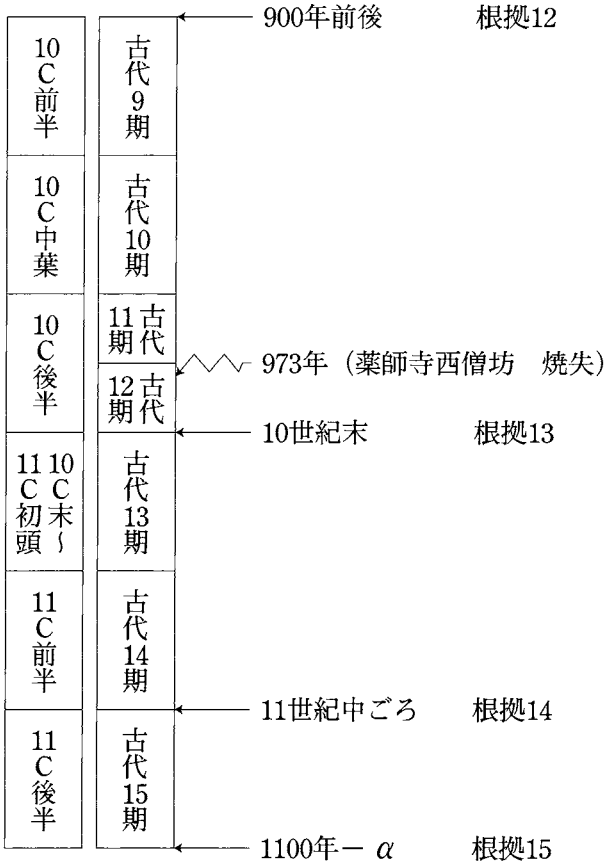


図102　実年代の比定（古代２関係）

ことができよう。従って、古代13期の開始は10世紀末と考えられる。

根拠14（古代14期の終末の時期）　古代14期には明瞭に明和27号窯式の灰釉陶器が伴う。明和27号窯式の終末は斎藤1994によると1150年ころとされていることによる。また、14期には白磁は出土せず15期になって白磁が出土し始める。森田1986によると白磁の出土は11世紀中ごろからとされており、14期終末と15期の開始は11世紀中ごろが想定される。

根拠15（古代15期の終末の時期）　古代15期には明瞭にともなう灰釉陶器はごくわずかである。しかし、灰釉陶器の出土の多い松本平との併行関係をみると古代15期は吉田川西遺跡のSB31段階（原1989）、松本平『総論編』の古代15期（小平1990）と明らかに併行しており、それらの２遺構からは西坂１号窯式の灰釉陶器も出土している。また、１例のみだが古代15期のSB18からも西坂１号窯式の灰釉陶器が出土している。したがって古代15期には西坂１号窯式が共伴すると仮定しておく。また、斎藤1994の年代観によると西坂１号窯式の終末は1110年とされている。1110年とした理由は、前段階の明和27号窯式の終末（猿投窯では百代寺の終末）を1150年としたとき、後続する西坂１号窯式には猿投窯の２型式分の時期が含まれると考えるため、一型式を30年とみた時に導き出された年代である。一型式を25年と考えれば２型式分で50年間、つまり1100年となり、西坂１号窯式の終末が11世紀代におさまるという理解も可能である[註8]。一方、古代14期の存続年代と15期の存続年代は遺構の数からいっても同程度と考えられる。したがって14期と15期は同じ様な時期幅が考えられ、古代15期の終末は1110年とするより1100－α年とする方が妥当と考える。

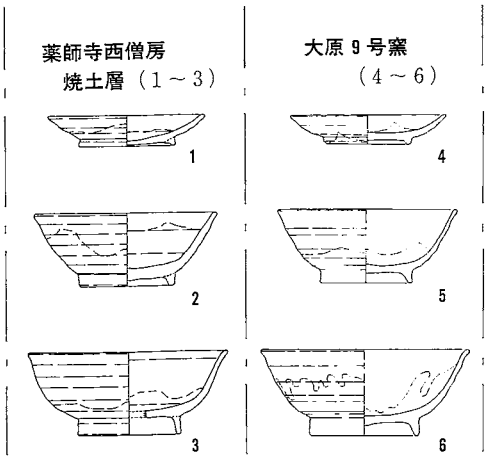


図103　薬師寺西僧房焼土層と大原９号窯出土資料の対比

松本平地域との併行関係　屋代遺跡群で示した古代１期～15期は、実年代や各器種の消長において若干の違いはあるものの、松本平地域での『総論編』に示された古代１期～15期におおむね併行している[註9]。

註１　古代８期の定義は、『古代１編』で述べたが、８期を土師器杯Ａの口径という視点でとらえると、次のようにいうことができる。「土師器杯ＡⅡの口径の分布範囲と口径平均は、古代９期と同じである。９期と異なる点は、食膳具の主体が土師器ではなく、黒色土器である点である。」古代９期以降の編年の時間軸については土師器杯Ａの法量が大きなポイントとなるが、この９期のみ、食膳具における土師器と黒色土器の比率が問題となる。比率は重量比での計測値を参考にしている点は、これまでの編年の考え方と同じである。

２　土師器杯Ａの明瞭な２法量分化にともない、この古代12期から杯Ａの区別を明確にするため、８期より口径の縮小傾向にあった土師器杯ＡⅡを杯ＡⅢと呼称し、二法量分化した大きい方を杯ＡⅡと呼ぶようにする。また、まれにみられる口径15cm以上のより大型のものは杯ＡⅠと呼んで区別する。

３　古代11期には大きい法量の土師器杯ＡⅠも存在すると思われるが、杯ＡⅠが存在し遺物数が少ない遺構では、杯Ａの明瞭な大小の２法量分化ととらえてしまい12期と区別することがむずかしくなる。したがって11期の杯ＡⅠの抽出はかなり困難で編年表５のその部分は空白としている。

４　善光寺平の概期資料をみればこの傾向を指摘することはできるが屋代遺跡群の場合、古代12期以降も２法量分化が顕著にみられない例も多い。

５　屋代遺跡群出土の10世紀以降の灰釉陶器を斎藤孝正氏、若尾正成氏に実見していただき型式を中心にご指導いただいた。しかし、各氏によって型式内容の把握に差があり、型式の一致をみない個体が多かった。このため型式名のみを述べると、とらえる人によって違いを生ずることが考えられるため、どの型式観によるかを明示して分析を行う必要がある。屋代遺跡群出土の10世紀以降の灰釉陶器を分析するにあたっては、若尾1987と若尾1988に示された型式観に従う。ただし、若尾氏はこの型式観の中で大原２号窯式前半とした北丘７号窯のとらえを、ハケぬりの施釉法がいまだ存続することから、光ヶ丘１号窯式の範疇

に入れてとらえることも検討中である。しかし、北丘７号窯式を光ヶ丘１号窯式の範疇に入れてとらえると、大原２号窯式前半の良好な資料が現在のところなくなってしまうため、北丘７号窯式は、大原２号窯式の前半に位置付くものと考えて分析を行うこととする。また、この若尾氏の型式観に従い標準とされる窯の資料も極力実見したが、このときの成果も取り入れながらの分析とする。ここで参考とした資料は光ヶ丘１号窯式前半として北丘８号窯、後半として北丘14号窯、北丘25号窯、北丘21号窯、大針４号窯、大原２号窯式前半として北丘７号窯、後半として大針３号窯、虎渓山１号窯式として北丘26号窯、北丘15号窯、虎渓山１号窯、虎渓山１号窯式から丸石２号窯式への移行期として大針１号窯、大原９号窯、丸石２号窯式として丸石２号窯、明和４号窯、明和27号窯式として明和27号窯、大原10号窯、西坂１号窯式として大原７号窯、白土原１号窯、大原11号窯の各資料である。器形の名称は屋代遺跡群の器種分類名に従った。

6　図92の産地の欄に「その他」という欄をつけた意味は、すべての遺物において同分類が同産地と考えてはまずいと考えたためである。しかし、分類は産地を推定するための大まかな目安にはなると考える。

7　図103は前川1984掲載の比較資料を大原９号窯とおきかえて提示した。

8　齋藤孝正氏に直接御教示いただいた。

9　松本平『総論編』で椀・皿の出土は古代７期からとしているが松本平でも古代６期から出土している例が多数確認できる。例として県埋文センター調査分の下神遺跡で古代６期とされた遺構で椀・皿をともなうものをあげると以下のようになる。（　）内は６～７期と幅のある遺構。SB48、SB66、SB92、SB110、(SB115)、(SB143)、SB148。

引用・参考文献

小平和夫　1990　「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４　総論編』(財)長野県埋蔵文化財センター

齋藤孝正　1994　「東海地方の施釉陶器生産―猿投窯を中心に―」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東３　施釉陶器―』古代の土器研究会第３回シンポジウム

原　明芳　1989　「吉田川西遺跡における食器の変容」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３吉田川西遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター

前川　要　1984　「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要III』

森田　勉　1986　「中国・朝鮮陶磁器の流通について」『中近世土器の基礎研究　II』

横田賢次郎・森田勉　1978　「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集　４』

若尾正成　1987　「白瓷から白瓷系陶器への転換期について」『美濃の古陶　美濃古窯研究会会報No１』美濃古窯研究会

若尾正成　1988　「白瓷の光ヶ丘１号窯式と大原２号様式について」『美濃の古陶　美濃古窯研究会会報No２』美濃古窯研究会

長野市教育委員会　1978　『田中沖遺跡　第１次発掘調査概報』

長野市教育委員会　1986　『浅川扇状地遺跡群―牟礼バイパスＢ・Ｃ・Ｄ地点―』

長野市教育委員会　1987　『三輪遺跡（２）―本郷住宅地地点―』

長野市教育委員会　1990　『屋地遺跡II―国補中小河川蛭川改修事業地点』

長野市教育委員会　1991　『田中沖遺跡II　長野市神明広田区画整備事業地点』

長野市教育委員会　1991　『松原遺跡　長野南農業協同組合集荷場施設建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

長野市教育委員会　1992　『南宮遺跡』

長野市教育委員会　1992　『二ツ宮遺跡・本掘遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』

長野市教育委員会　1999　『綿内遺跡群　高野遺跡』

(財)長野県埋蔵文化財センター　1990　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書６　松本市内　その３　下神遺跡』

(財)長野県埋蔵文化財センター　1994　『中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14　長野市内　その２　鶴前遺跡』

多治見市教育委員会　1981　『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』

多治見市教育委員会　1984　『北丘25号窯・26号窯発掘調査報告書』

多治見市教育委員会　1985　『大原古窯跡群発掘調査報告書　大原７・８・９・10・11・12・13号窯』

多治見市教育委員会　1987　『一般国道248号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

多治見市教育委員会　1989　『白土原１・２・３号窯発掘調査報告書』

多治見市教育委員会　1990　『明和古窯跡群発掘調査報告書』

多治見市教育委員会　1990　『虎渓山４・５号発掘調査報告書』

第３節　重要遺物（土器）

１　灯明具

古代８期後半以降も灯明用に使用されたと思われる土器が多数出土している（表86）。分類の基準は『古代１編』と同様である(註1)。この分類基準に沿って代表的なものを図示し（図104）、灯明具として使われた可能性が強い灯明具１と灯明具２をもとに分析を行った（図105）。図105によると時期別推移では８期後半が最も多く、９期以後も一定の出土量がみられ、中世へと続いている。屋代遺跡群では13期以降に多く、更埴条里遺跡では12期までに多いというように時期的なかたよりがあるのは、遺構の密度との関係による。使われる器は食膳具の転用例が多く、食膳具の中でも最も日常的に使用される器種に多い。土器の種類で土師器や黒色土器Ａが多い点や、器種別の割合で杯ＡⅢ、杯ＡⅡ、小椀、椀といったものが多いことがそのことをよく裏付けている。特殊な使用例についてみてみると、椀の高台部を灯明用に使ったと考え

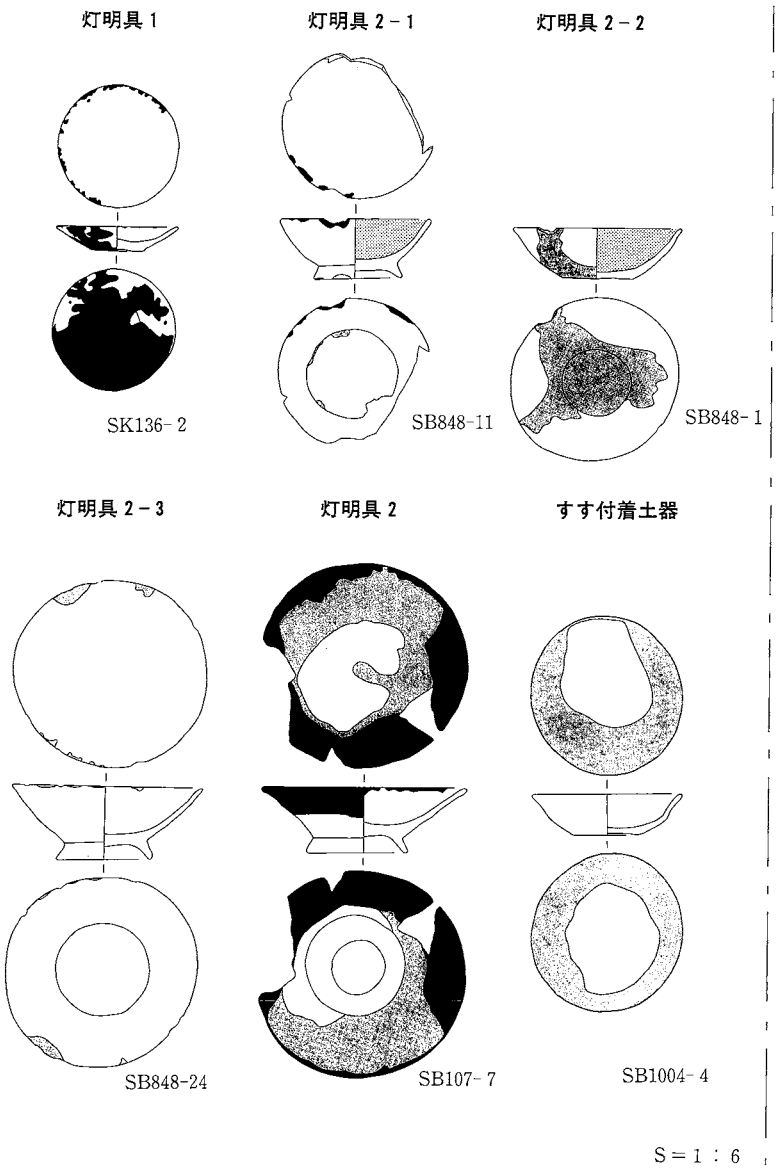


図104　灯明具の分類（古代２関係）

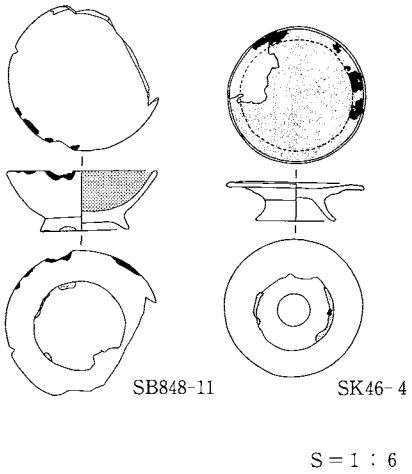


図106　特殊な灯明具（古代２関係）

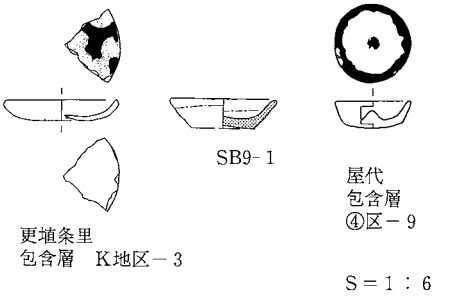


図107　更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土
中世の灯明皿

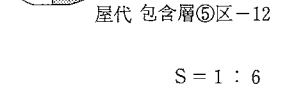


図108　屋代遺跡群出土　近世の灯明具

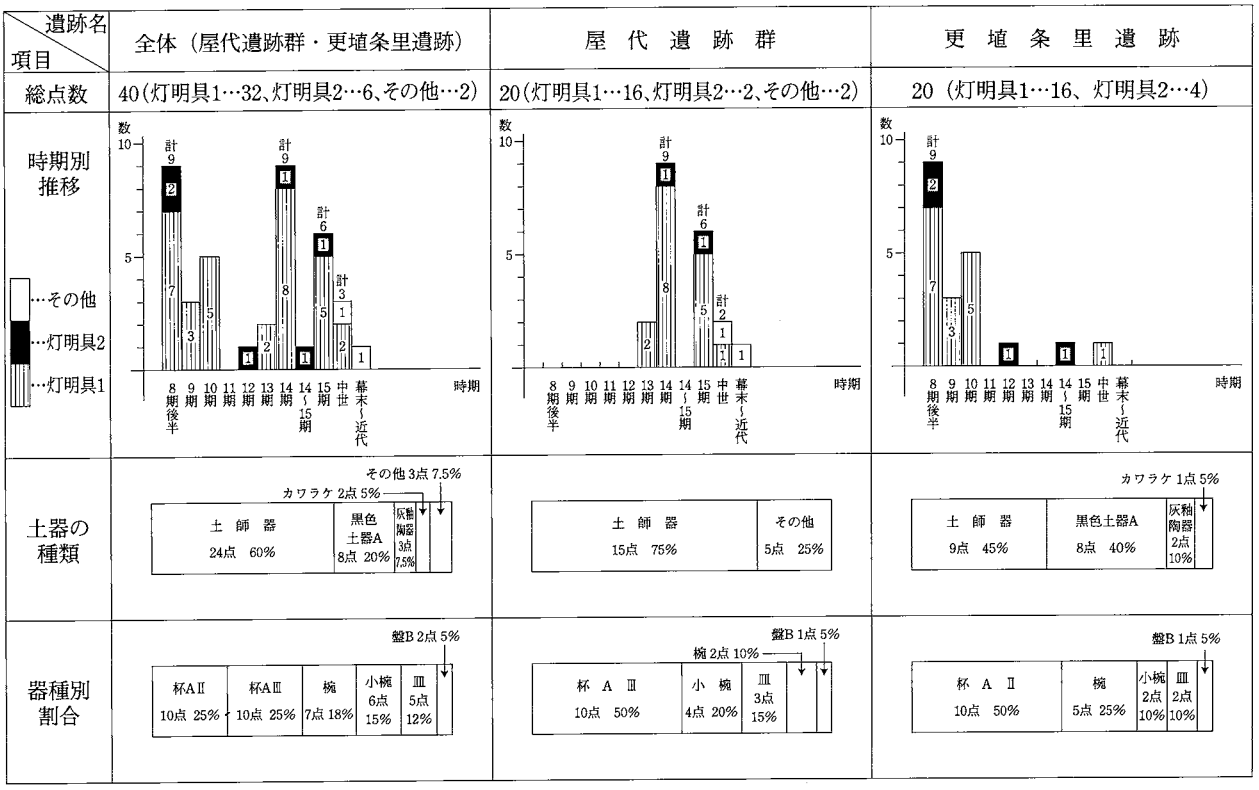
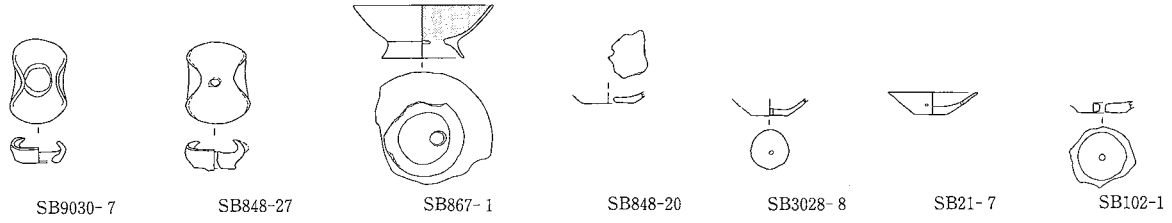


図105　灯明具の分析（古代８期後半以降）

られる例がみられる。高台部のみ使った例（SB821-1）、高台部と口縁部両方を使った例もある（図106-左）。図106-右は土師器盤ＢIIだが、内面の口縁から１cm弱のところに一段高い盛り上り部があり、盛り上り部から口縁部の間はやや低い窪みがまわっている。灯芯状のこびりつきはこのやや低い窪みの部分に多くみられ、内面の多くはすすけている。しかし外面には全くすすはない。高台部にも灯芯状のこびりつきとすすが残る。住居内で出土地点が確認できる例ではカマドの近辺で出土する例が多めにみられる。屋代遺跡群で出土した中世関係の灯明具は図107に、近世関係の灯明具は図108に図化した。図107-左は底部がヘラ削りされるカワラケで、図107-中は古瀬戸後期様式の縁釉小皿を灯明用に使っている。近世の図108は灯芯状のこびりつきはないが形態から灯明皿と判断できる。底部はヘラ削りされている。

2　穿孔土器

土器の一部に穿孔されるものが僅かにみられる。その一覧表を時期順に並べて提示する（表87）。図109には集成図を掲載した。土師器耳皿と土師器杯AIIIが複数みられ、底面に穿孔されるものが多い。



S＝1：8

図109　更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土の穿孔土器（古代２関係）

表86　灯明具一覧表（古代２以降）

No	図版No	掲載No	遺物名	遺跡名	出土遺構	時期	土器の種類・器種	ＰＬ	備考
1	112	1	すす付着土器	更埴条里	SB805カマド内	古代９期	黒色土器杯ＡII		
2	113	21	灯明具１	更埴条里	SB806カマド脇	古代10期	灰釉陶器椀Ａ		
3	113	4	灯明具１	更埴条里	SB806カマド脇	古代10期	土師器杯ＡII		
4	114	7	灯明具１	更埴条里	SB821	古代10期	土師器杯ＡII		
5	114	1	灯明具１	更埴条里	SB821覆土下層	古代10期	黒色土器Ａ椀	PL13-5	椀の高台部が灯明用に使われている　暗文もあり
6	116	4	すす付着土器	更埴条里	SB827ピット内	古代９期	土師器皿ＡII		
7	116	8	すす付着土器	更埴条里	SB827床	古代９期	土師器皿ＡII		
8	117	1	灯明具１	更埴条里	SB840カマド周辺	古代８期後半	黒色土器Ａ杯ＡII		
9	119	11	灯明具１	更埴条里	SB848覆土下層	古代８期後半	黒色土器Ａ小椀	PL14-4	小さなわれ口に灯芯が付く　高台も灯明用に使用
10	119	1	灯明具２	更埴条里	SB848カマド脇	古代８期後半	黒色土器Ａ杯ＡII	PL14-2	灯明具２-(2)
11	119	24	灯明具１	更埴条里	SB848カマド脇	古代８期後半	土師器椀	PL14-3	
12	119	23	灯明具１	更埴条里	SB848カマド脇	古代８期後半	土師器椀		
13	119	12	灯明具２	更埴条里	SB848覆土	古代８期後半	土師器杯Ａ		灯明専用器の可能性あり
14	119	17	すす付着土器	更埴条里	SB848カマド脇	古代８期後半	土師器杯ＡII		
15	119	18	すす付着土器	更埴条里	ＳＢ848覆土下層壁際	古代８期後半	土師器杯ＡII		
16	121	9	すす付着土器	更埴条里	SB852覆土中層	古代９期	土師器皿ＡII		
17	121	8	灯明具１	更埴条里	SB852	古代９期	黒色土器Ａ杯ＡII		
18	121	2	灯明具１	更埴条里	SB859	古代８期後半	黒色土器Ａ杯ＡII		
19	121	1	灯明具１	更埴条里	SB859カマド	古代８期後半	黒色土器Ａ椀		暗文もあり
20	123	10	灯明具１	更埴条里	SB865カマド脇	古代９期	土師器杯ＡII		
21	123	3	すす付着土器	更埴条里	SB867	古代９期	土師器皿ＡII		内面のみにすす　下皿？
22	125	4	すす付着土器	更埴条里	SB1004	古代９期	土師器杯ＡII		
23	125	8	すす付着土器	更埴条里	SB1004	古代９期	土師器椀		
24	127	4	灯明具２	更埴条里	SB9016床	古代14～15期	土師器盤ＢＩ		灯明具２-(1)
25	128	3	灯明具１	更埴条里	SB9029	古代９期	土師器杯ＡII		
26	129	1	灯明具２	更埴条里	SB9035覆土下層	古代12期	黒色土器Ａ小椀		
27	131	8	灯明具１	更埴条里	SB9049	古代10期	灰釉陶器皿		
28	144	8	灯明具１	更埴条里	SK8111	古代８期後半	土師器杯ＡII		
29	276	3	灯明具１	更埴条里	Ｋ地区IXTR07III－２層	中世	カワラケ		
30	133	13	灯明具２	屋代	SB1床	古代14期	土師器小椀		
31	132	9	すす付着土器	屋代	SB1床	古代14期	土師器杯ＡＩ		
32	133	7	すす付着土器	屋代	SB2壁際	古代15期	土師器杯ＡIII		口縁部にすすの付き方の濃い部分あり
33	135	1	灯明具１	屋代	SB13覆土上層	古代13期	黒色土器Ｂ小椀		
34	136	4	灯明具１	屋代	SB23床	古代14期	土師器杯ＡIII		
35	137	7	すす付着土器	屋代	SB40覆土上層	古代15期	土師器杯ＡIII		
36	137	1	灯明具１	屋代	SB101ピット内	古代14期	土師器杯ＡIII		
37	137	4	灯明具１	屋代	SB101	古代14期	土師器杯ＡIII		
38	139	1	灯明具１	屋代	SB106覆土下層	古代15期	土師器杯ＡIII		
39	139	1	灯明具１	屋代	SB107カマド内	古代15期	土師器杯ＡIII		
40	139	7	灯明具２	屋代	SB107カマド脇	古代15期	土師器椀	PL17-5	
41	139	3	灯明具１	屋代	SB108床	古代15期	土師器小椀	PL17-6	
42	139	3	灯明具１	屋代	SB109	古代15期	土師器杯ＡIII		
43	140	7	灯明具１	屋代	SB3022床	古代13期	土師器小椀		
44	142	6	灯明具１	屋代	SB4201カマド脇	古代14期	灰釉陶器椀Ｂ		
45	142	4	灯明具１	屋代	SB4502床	古代14期	土師器杯ＡIII		
46			灯明具１	屋代	SC3123IVL23 (SB3027-8)	古代６期、14期前後の混入有	土師器杯ＡIII		口縁に小さな人為的くぼみあり
47	145	4	灯明具１	屋代	SK46	古代15期前後	土師器盤ＢII	PL18-7	灯明専用器？内面の口縁近くがもりあがる
48	145	1	灯明具１	屋代	SK136	古代14期	土師器杯ＡIII		
49	145	2	灯明具１	屋代	SK136	古代14期	土師器杯ＡIII	PL18-8	油が下にまわったあと明瞭
50	272	1	灯明具１	屋代	SB9	中世後半	古瀬戸縁釉小皿	PL37-4	
51	277	6	灯明具？	屋代	④区包含層	中世	ヘソカワラケ	PL36-28	こびりつきの付き方が不自然
52	313	12	灯明皿	屋代	⑤区ｂ区	幕末～近代	在地産陶器皿	PL48-15	灯芯状のこびりつきはないが形態から判断

表87　穿孔土器一覧表（古代２関係）

No	図版No	掲載No	遺物名	遺跡名	出土遺構・層位	時期	土器の種類・器種	備考・特徴
1	119	20	底部穿孔土器	更埴条里	SB848	古代８期後半	土師器杯ＡII	
2	120	27	底部穿孔土器	更埴条里	SB848　床	古代８期後半	土師器耳皿	
3	128	7	底部穿孔土器	更埴条里	SB9030　覆土下層	古代８期後半	土師器耳皿Ａ	大きい孔
4	123	1	底部穿孔土器	更埴条里	SB867　床	古代９期	黒色土器Ａ椀	
5	141	8	底部穿孔土器	屋代	SB3028　覆土下層	古代13期	土師器杯ＡIII	
6	135	7	体部穿孔土器	屋代	SB21　覆土下層	古代14期	土師器杯ＡIII	ワラ状のものが体部に刺さって消失か
7	138	1	底部穿孔土器	屋代	SB102	古代15期	土師器杯ＡII	

3　底部縁辺加工土器

椀又は皿の底部周辺を意図的に打ち欠いた土器がわずかにみられる。灰釉陶器と緑釉陶器にみられ、表88と図110に出土例をまとめた。

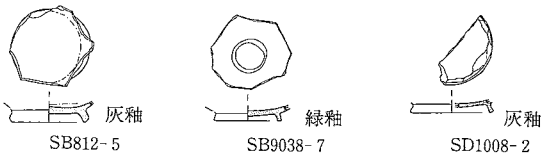


図110　更埴条里遺跡出土の底部縁辺加工土器（古代２関係）

表88　底部縁辺加工土器一覧表（古代２関係）

No	図版No	掲載No	遺跡名	出土遺構	時期	土器の種類・器種	備考・特徴
1	114	5	更埴条里	SB812カマド内	古代９期	灰釉陶器椀Ａ	転用硯も兼ねる
2	129	7	更埴条里	SB9038カマド周辺	古代９期	緑釉陶器椀	
3	143	2	更埴条里	SD1008	古代13～14期	緑釉陶器椀又は皿	

4　墨書・刻書土器

古代８期後半以降に出土した文字関係資料は７点である（表89）(註2)。墨書２点、刻書４点、箆書１点で、絵のようなものが描かれている例が目につく（図111）。

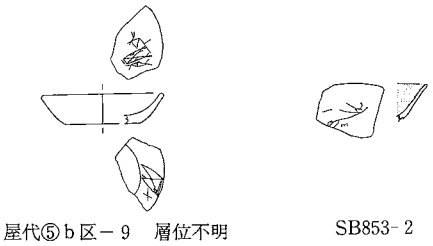


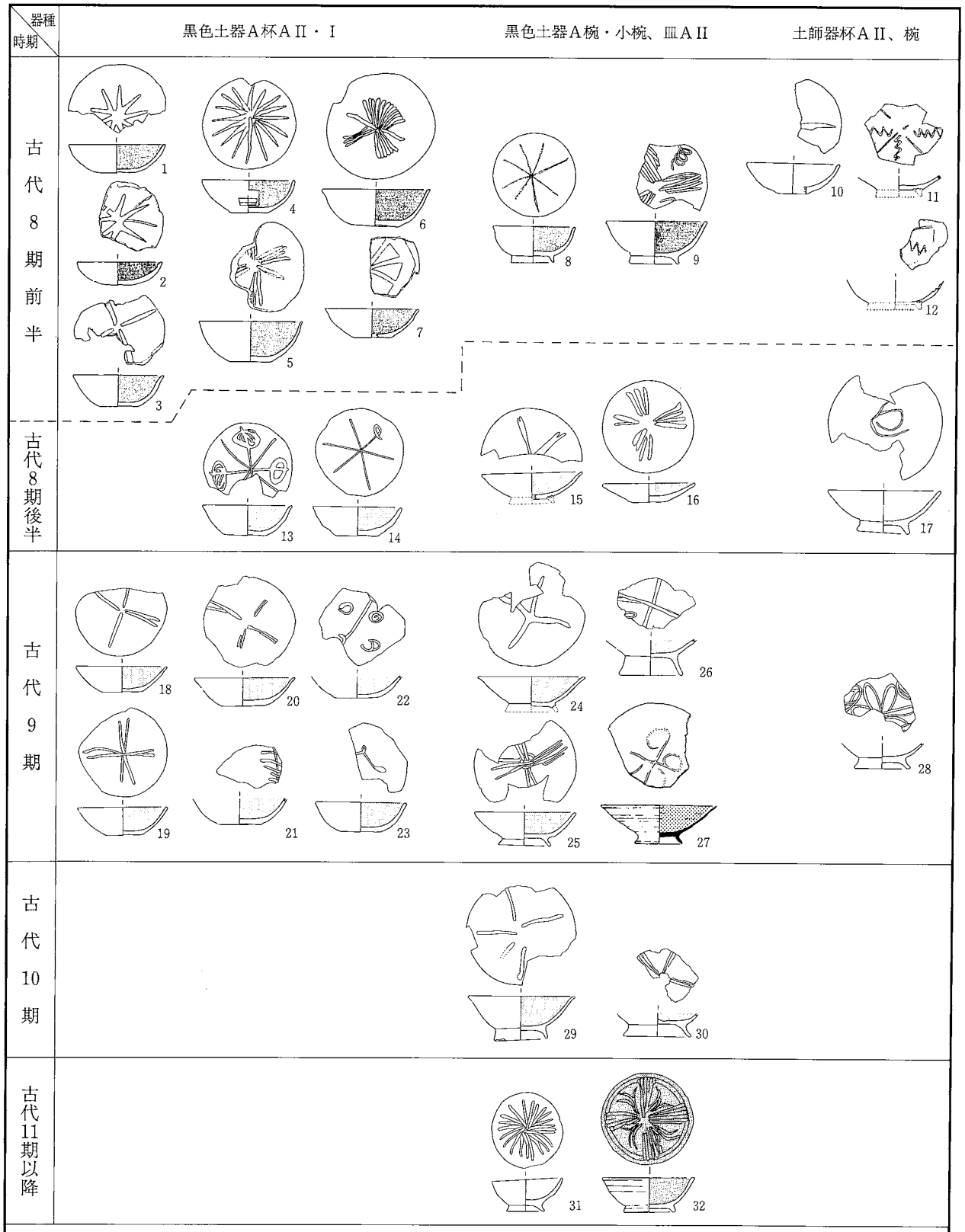
図111　更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土　絵？が描かれた土器

表89　文字関係資料一覧表（古代２以降）

No	図版No	掲載No	遺跡名	出土遺構・層位	時期	土器の種類・器種	文字の読み	部位	方向	文字数	遺物名	ＰＬ
1	121	2	更埴条里	SB853	古代８期後半～９期	黒色土器Ａ杯又は椀	□絵	体部外面			刻書	
2	130	4	更埴条里	SB9046床	古代８期後半	黒色土器Ｂ皿Ｂ	□[政カ]	体部内面			刻書	
3	143	5	更埴条里	SD857	古代９期	土師器杯ＡⅡ	□	体部外面			箆書	
4			更埴条里	SK9205	不明	黒色土器Ａ杯Ａ又は椀	□				墨書	
5			屋代	SD5001	中世への混入	黒色土器Ｂ皿	□	体部外面			刻書	
6	146	9	屋代	⑤ｂ区層位不明	12～15期	土師器杯ＡⅡ	□絵	体部内面			刻書	PL18-10
7	276	1	屋代	SX4001	中世	白磁碗	□	底部内面		１文字	墨書	PL36-14

5　暗文をもつ土器

畿内系の土器（『古代１編』）以外で、内面に暗文をもつ土器が８期以降一定量みられる。それらの主なものを図112に集成した。土器の種類では黒色土器Ａと土師器にみられ、黒色土器Ａが圧倒的に多い。器種では、杯Ａ、椀に多くみられ、小椀や皿にもわずか確認できる。暗文の内容は内面の中心部から放射状にほどこされるものが多く、様々な形が認められる。８期と９期に多くみられ10期から減少し、11期以降はわずかとなる。



出土遺構一覧

1 SB9043-22	5 SB9067-18	9 SK9280-1	13 SK10023-1	17 SB9046-7	21 SB9051-1	25 SB1004-3	29 SB821-1
2 SD273-2	6 ③a区第１水田面-2	10 SB9028-2	14 SK8152-1	18 SB852-1	22 SB802-1	26 SB9051-2	30 SB9047-1
3 SB3008-2	7 SB9028-1	11 SB74a-4	15 SB804-6	19 SB845-1	23 SB9029掘方-15	27 南沖Ⅲ18号住-10	31 SK9270-1
4 SK9907-1	8 ③a区第１水田面-7	12 SB74a-3	16 SB9030-4	20 SB865-4	24 SB801-1	28 SB865-12	32 田中沖Ⅱ54号住-43

図112　内面に暗文をもつ土器集成図（古代８期前半以降）　　Ｓ＝１：８

註1　灯明具の分類基準は以下のようである。

・灯明具1‥‥口縁部に灯芯状のこびりつきがあるもの。

・灯明具2‥‥口縁部に灯芯状のこびりつきはないが、すす又はこびりつきが付着しているもの。

以下の3つに細分する場合もある。

・灯明具2－1‥‥口縁部に小さな割れ口があり、その部分にすす又はこびりつきが付着しているもの。

・灯明具2－2‥‥口縁部に小さな割れ口があり、そこから外面にすす又はこびりつきが流れ落ちるように付いているもの。

・灯明具2－3‥‥灯芯状のこびりつきでなく、灯芯状にすすが残っているもの。

・すす付着土器‥‥土器の内側又は外側又は両方にすすが付着しているもの。

2　明らかに古代8期後半以降への混入と思われるものについては、すでに『古代1編』で報告した。ここではそれと重複しない資料を対象とし、中世への混入も含めて資料化した。

第４節　屋代遺跡群出土灰釉陶器の胎土分析

(株)第四紀地質研究所　井上　巌

Ｘ線回析試験及び化学分析試験

１　実験条件

１－１　試料

分析に供した試料は表90胎土性状表に示す通りである。

Ｘ線回析試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。

化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

１－２　Ｘ線回析試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はＸ線回析試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線解析装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target：Cu、Filter：Ni、Voltage：40kV、Current：30mA、ステップ角度：0.02°、計数時間：0.5秒。

１－３　化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧：15kV、分析法：スプリント法、分析倍率：200倍、分析有効時間：100秒、分析指定元素10元素で行った。

２　Ｘ線回析試験結果の取扱い

実験結果は表90胎土性状表に示す通りである。

表90右側にはＸ線回析試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

Ｘ線回析試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とＸ線回析試験で得られたムライト（Mullite)、クリストバライト（Cristobalite）等の組成上の組合わせとによって焼成ランクを決定した。

２－１　組成分類

(1)　Mont-Mica-Hb　三角ダイアグラム

図113に示すように三角ダイアグラムを１～13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mont、Mica、Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14に入れ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト（Mont)、雲母類（Mica)、角閃石（Hb）のＸ線回折試験におけるチャートのピ

表90　胎土性状表

試料 No	タイプ分類	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物														備考	
		Mo-Mi-Hb	Mo-Ch,Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au		
屋代遺跡群-1	B	14	20						3561	80	685	155	92			148		皿	古代8期前半
屋代遺跡群-2	B	14	20						3722	79	696	148				149		皿	古代9期
屋代遺跡群-3	B	14	20						4481	79	980	125	86			121		皿	古代9期
屋代遺跡群-4	B	14	20						3499	66	178	153	96			145		椀A	古代7期後半～8期前半
屋代遺跡群-5	B	14	20						1167	105	180	201				189		椀A	古代8期前半
屋代遺跡群-6	B	14	20						3205	76	425	150				125		椀A	古代6～7期
屋代遺跡群-7	B	14	20						4390	79	463	126				107		皿	古代7期
屋代遺跡群-8	B	14	20						1590	91	260	218				190		小椀	古代8期前半
屋代遺跡群-9	B	14	20						1482	102	258	226				198		蓋	古代8期前半
屋代遺跡群-10	B	14	20						2743	88	1398	166				156		瓶類の底	古代9期
屋代遺跡群-11	B	14	20						3728	84	705	144				128		椀A	古代9期
屋代遺跡群-12	B	14	20						1356	97	168	224				165		皿	古代7期後半
屋代遺跡群-13	B	14	20						1407	104	156	178				162		皿	古代9期
屋代遺跡群-14	B	14	20						1683	103	142	183				160		皿	古代8期前半
屋代遺跡群-15	B	14	20						1551	101	204	204				156		皿	古代10期
屋代遺跡群-16	A	5	20			62			2198	102	1029	182	106			154		段皿	古代8期前半
屋代遺跡群-17	B	14	20						2274	91	432	192	104			155		椀A	古代9期
屋代遺跡群-18	B	14	20						3260	91	1200	211				178		椀B	古代13～14期
屋代遺跡群-19	B	14	20						6322	59	71	87	106			86		椀B	古代15期
屋代遺跡群-20	B	14	20						1971	92	322	214				146		皿	古代8期後半～9期
屋代遺跡群-21	B	14	20						2859	73	1597	140				116		段皿	古代13～14期
屋代遺跡群-22	B	14	20						2315	96	134	158				131		椀B	古代15期
屋代遺跡群-23	B	14	20						2703	97	212	151				131		椀A	古代7期
屋代遺跡群-24	B	14	20						2923	81	414	141				134		皿	古代7期後半
屋代遺跡群-25	B	14	20						2095	94	157	195	111			149		椀A	古代8期前半
屋代遺跡群-26	B	14	20						1806	80	1092	206				187		皿	古代9期
屋代遺跡群-27	B	14	20						2702	94	263	188				157		皿	古代8期前半
屋代遺跡群-28	B	14	20						1355	106	317	220				174		小椀	古代14期
屋代遺跡群-29	B	14	20						3151	83	320	134				118		椀	古代15期
屋代遺跡群-30	B	14	20						1263	98	626	193				165		短頸壺	古代7期前半

Mont：モンモリロナイト　Mica：雲母類　Hb：角閃石　Ch：緑泥石(Ch:Fe　一次反射、Ch:Mg　二次反射)　Qt：石英　Pl：斜長石　Crist：クリストバライト　Mullite：ムライト　K-fels：カリ長石　Halloy：ハロイサイト　Kaol：カオリナイト　Pyrite：黄鉄鉱　Au：普通輝石　Py：紫蘇輝石

ーク強度をパーセント（%）で表示する。

モンモリロナイトはMont／Mont＋Mica＋Hb＊100でパーセントとして求め、同様にMica,Hbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の１～４はMont、Mica、Hbの３成分を含み、各辺は２成分、各頂点は１成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は図113に示す通りである。

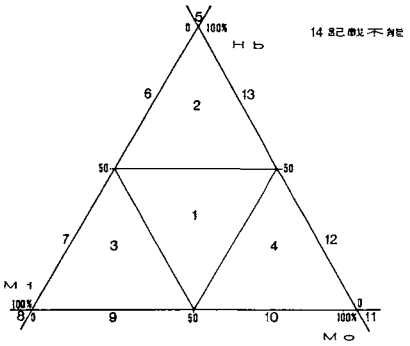


図113　三角ダイヤグラム位置分類図

(2)　Mont-Ch、Mica-Hb　菱形ダイアグラム

図114に示すように菱形ダイアグラムを１～19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト（Mont）、雲母類（Mica）、角閃石（Hb）、緑泥石（Ch）の内、

ａ）３成分以上含まれない、ｂ）Mont、Chの２成分が含まれない、ｃ）Mica、Hbの２成分が含まれない、の３例がある。

菱形ダイアグラムはMont-Ch、Mica-Hbの組み合わせを表示するものである。

Mont-Ch、Mica-HbのそれぞれのＸ線回析試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mont／Mont＋Ch＊100と計算し、Mica、Hb、Chも各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイアグラム内にある１～７はMont、Mica、Hb、Chの４成分を含み、各辺はMont、MiCa、Hb、Chのうち３成分、各頂点は２成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は図114に示すとおりである。

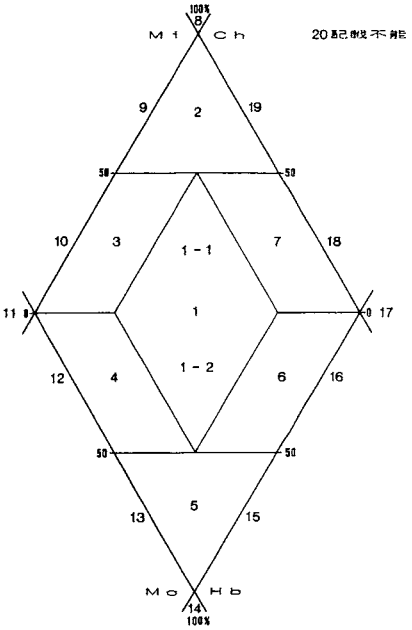


図114　菱形ダイヤグラム位置分類図

(3)　化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法（10元素全体で100%になる）で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいてSiO_2—AI_2O_3、Fe_2O_3—MgO、K_2O—CaOの各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

3　分析結果

3－1　Ｘ線回析試験結果

3－1－1　タイプ分類

表90胎土性状表には屋代遺跡群出土の灰釉陶器が記載してある。タイプ分類はこれらの土器でおこない、表91タイプ分類一覧表を作成した。

表91に示すように土器胎土はＡとＢの２タイプに分類された。

Ａタイプ：Hb１成分を含み、Mont、Mica、Chの３成分に欠ける

Ｂタイプ：Mont、Mica、Hb、Chの４成分に欠ける。

須恵器は高温で焼成されているために鉱物が分解し、ガラスに変質している。そのため、4成分が検出されない。

最も多いタイプはBタイプで、Aタイプは1個、Bタイプは29個である。

3－2－2　石英（Qt）－斜長石（Pl）の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団がもつ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は、固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂は各々固有の石英と斜長石比を有していると言える。

図116-5　Qt—Pl図に示すようにⅠとⅡの2グループに分類された。

Ⅰグループ：Qtが800～3000、Plが70～120の領域にあり、東濃系の土器が集中し、在所不明と尾北系の土器が混在する。

Ⅱグループ：Qtが2500～5000、Plが70～100の領域にあり、在所不明の土器が集中し、尾北系と猿投系の土器が共存する。

表91　タイプ分類一覧表

試料No	タイプ分類	備考	
屋代遺跡群-16	A	段皿	古代8期前半
屋代遺跡群-1	B	皿	古代8期前半
屋代遺跡群-2	B	皿	古代9期
屋代遺跡群-3	B	皿	古代9期
屋代遺跡群-4	B	椀A	古代7期後半～8期前半
屋代遺跡群-5	B	椀A	古代8期前半
屋代遺跡群-6	B	椀A	古代6～7期
屋代遺跡群-7	B	皿	古代7期
屋代遺跡群-8	B	小椀	古代8期前半
屋代遺跡群-9	B	蓋	古代8期前半
屋代遺跡群-10	B	瓶類の底	古代9期
屋代遺跡群-11	B	椀A	古代9期
屋代遺跡群-12	B	皿	古代7期後半
屋代遺跡群-13	B	皿	古代9期
屋代遺跡群-14	B	皿	古代8期前半
屋代遺跡群-15	B	皿	古代10期
屋代遺跡群-17	B	椀A	古代9期
屋代遺跡群-18	B	椀B	古代13～14期
屋代遺跡群-19	B	椀B	古代15期
屋代遺跡群-20	B	皿	古代8期後半～9期
屋代遺跡群-21	B	段皿	古代13～14期
屋代遺跡群-22	B	椀B	古代15期
屋代遺跡群-23	B	椀A	古代7期
屋代遺跡群-24	B	皿	古代7期後半
屋代遺跡群-25	B	椀A	古代8期前半
屋代遺跡群-26	B	皿	古代9期
屋代遺跡群-27	B	皿	古代8期前半
屋代遺跡群-28	B	小椀	古代14期
屋代遺跡群-29	B	椀	古代15期
屋代遺跡群-30	B	短頸壺	古代7期前半

4　化学分析結果

表92化学分析表に示すように、屋代遺跡の土器を化学分析した。分析結果に基づいて図116-6　SiO_2—Al_2O_3図、図116-7　Fe_2O_3—MgO図、図116-8　K_2O—CaO図を作成した。

4－1　SiO_2—Al_2O_3の相関関係について

図116-6　SiO_2—Al_2O_3図に示すようにⅠとⅡの2グループに分類された。

Ⅰグループ：SiO_2が68～74%、Al_2O_3が18～24%の領域にあって、東濃系の土器が集中する。

Ⅱグループ：SiO_2が73～82%、Al_2O_3が13～20%の領域にあって、尾北系、在所不明の土器が集中し、猿投系の土器が共存する。

4－2　Fe_2O_3—MgOの相関について

図116-7　Fe_2O_3—MgO図に示すように、ⅠとⅡの2グループに分類された。

Ⅰグループ：Fe_2O_3が1～3%、MgOが0.2～0.6%の領域にあって、東濃系、在所不明の土器が集中し、猿投系の土器が共存する。

Ⅱグループ：Fe_2O_3が1～3%、MgOが0.0～0.3%の領域にあって、尾北系の土器が集中する。

4－3　K_2O—CaOの相関について

図116-8　K_2O—CaO図に示すように、Ⅰ～Ⅱの2グループに分類された。

Ⅰグループ：K_2Oが1.8～3.3%、CaOが0.0～0.4%の領域にあって、尾北系、在所不明の土器が共存する。

Ⅱグループ：K_2Oが2.8～4.3%、CaOが0.1～0.3%の領域にあって、東濃系の土器が集中する。

5　まとめ

(1)　土器胎土はＡとＢの２タイプに分類され、Ｂタイプは高温で焼成された土器で、鉱物が分解してガラス化したもの。

(2)　Ｘ線回析試験に基づくQt—PI相関ではⅠとⅡの２グループに分類された。Ⅰグループには東濃系の土器、Ⅱグループには尾北系と在所不明の土器が集中し、明瞭に分類される。

(3)　化学分析結果に基づいて表93組成分類表を作成した。

土器胎土はSiO_2—Al_2O_3の相関において、SiO_2の値が低いグループをαタイプ、SiO_2の値が高いグループをβタイプとして、大きく２タイプに分類し、さらに、Fe_2O_3—MgOの相関において２タイプに細分した。

この結果は表93に示すようにSiO_2の値が低い領域にあるものは、MgOの値が大のタイプと小のタイプに２分された。同様にSiO_2の値が高い領域にあるものもMgOの値が大のタイプと小のタイプに２分された。この結果として５タイプに分類された。

(4)　これらの結果によると、SiO_2の値が低い領域にあって、MgOの値が大のタイプは東濃系の土器、SiO_2の値が高い領域にあって、MgOの値が大のタイプは在所不明の土器、SiO_2の値が高い領域にあって、MgOの値が小のタイプは尾北系と猿投系の土器に分類された。また、屋代—30の清ケ谷は清ケ谷窯跡の土器と成分的に近い。

編者註　図115　各窯跡領域図は、更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土灰釉陶器の分析結果比較のため、(株)第四紀地質研究所所有のデータを掲載させていただいた。ここでの分析結果をふまえての考察は「第11章　第２節　２－(4)　搬入系土器　Ａ　灰釉陶器」の項を参照。

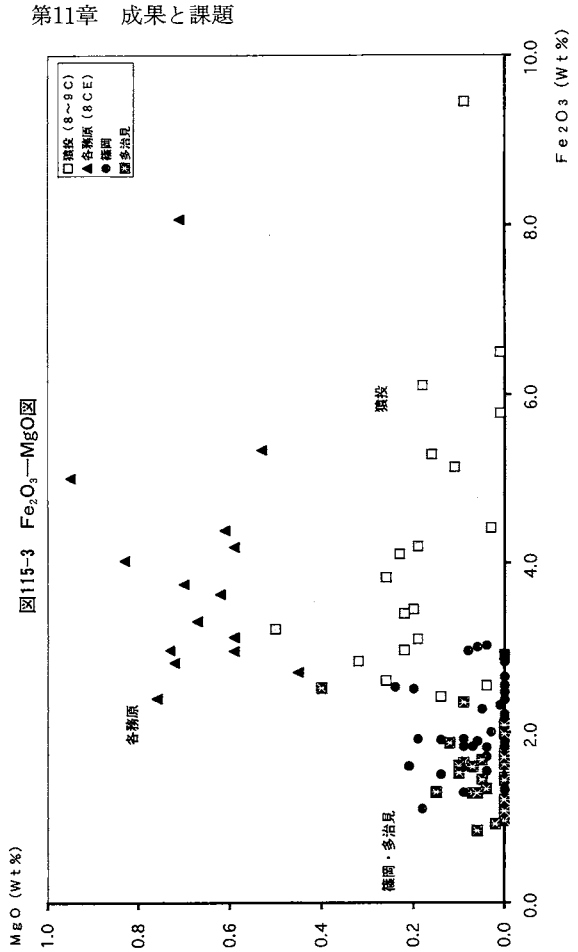


図115-3　Fe_2O_3—MgO図

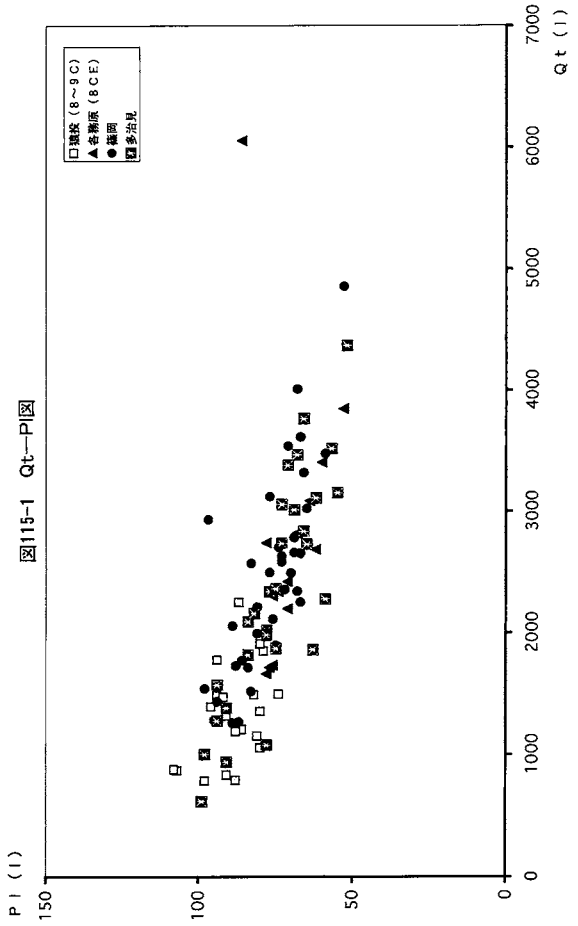


図115-1　Qt—PI図

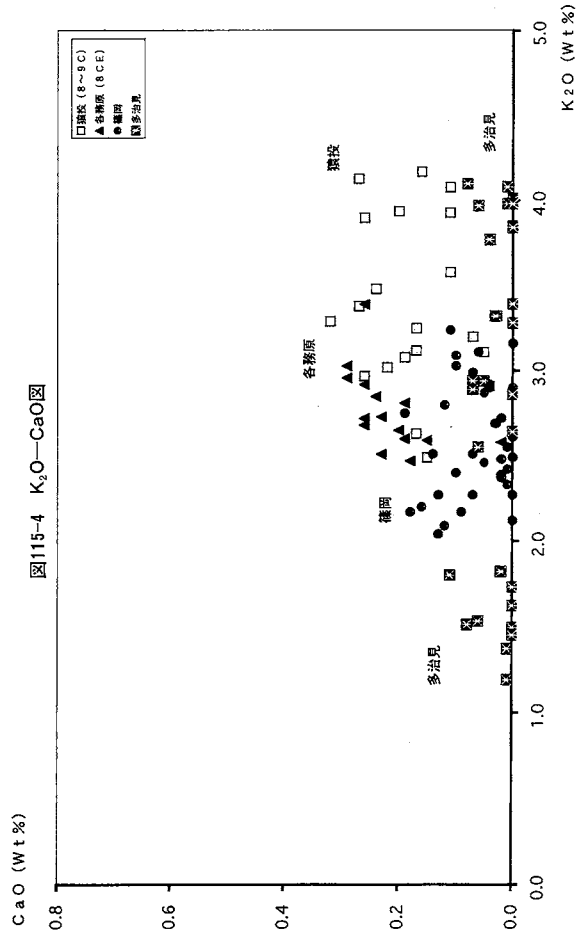


図115-4　K_2O—CaO図

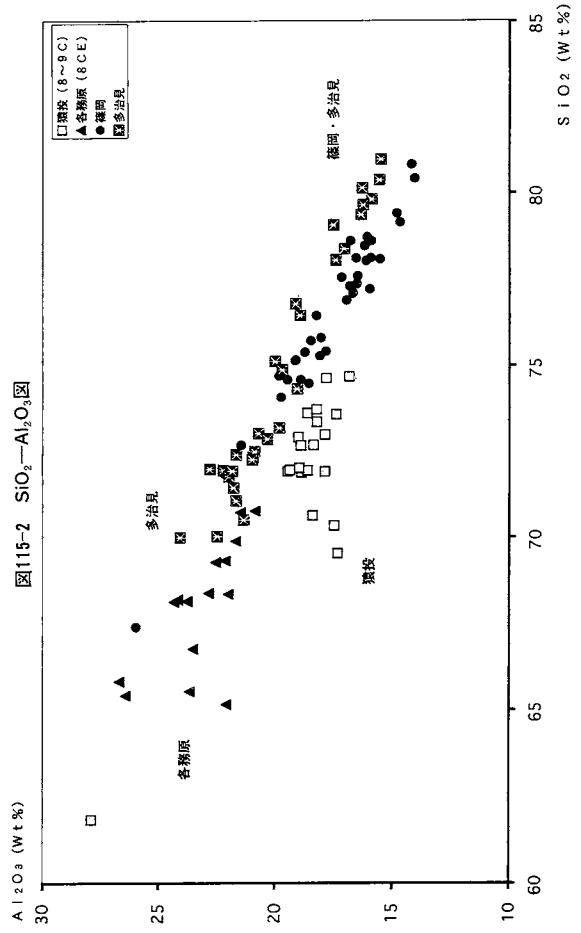


図115-2　SiO_2—Al_2O_3図

図115　各窯跡領域図

図116-5　Qt—Pl図

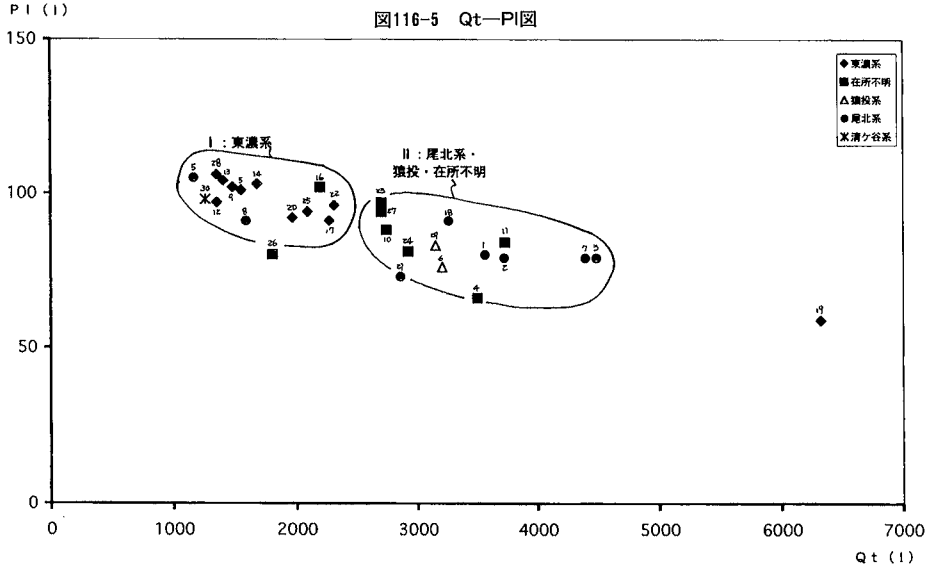


図116-7　Fe_2O_3—MgO図

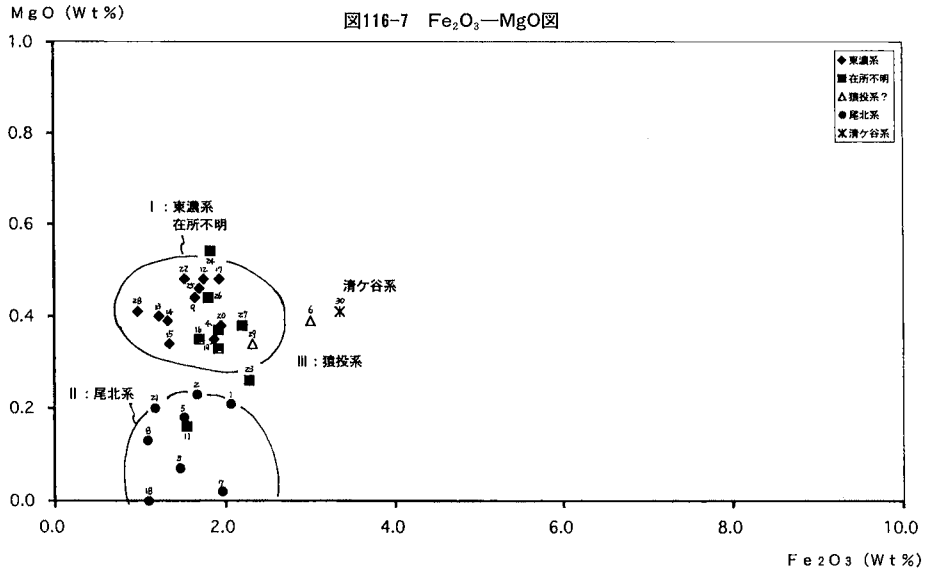


図116-6　SiO_2—Al_2O_3図

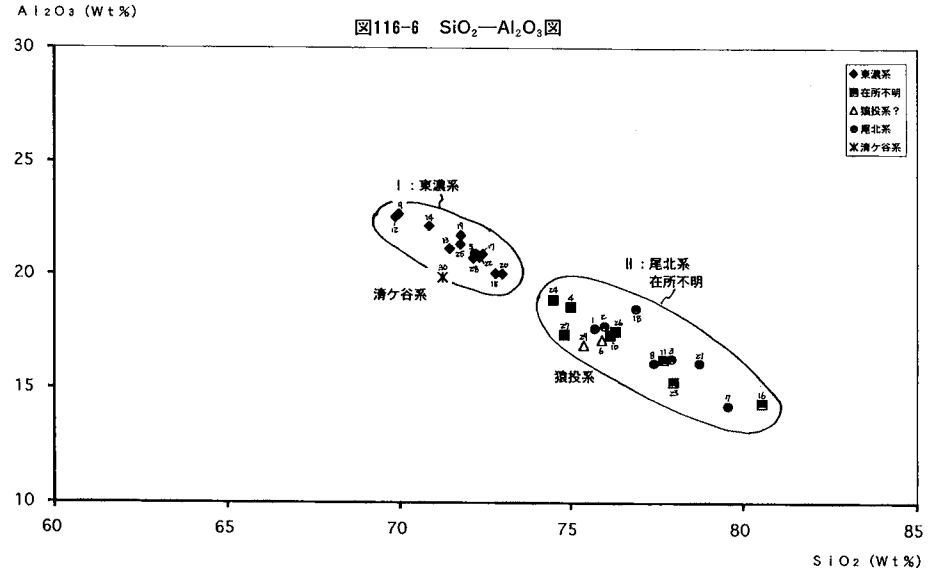


図116-8　K_2O—CaO図

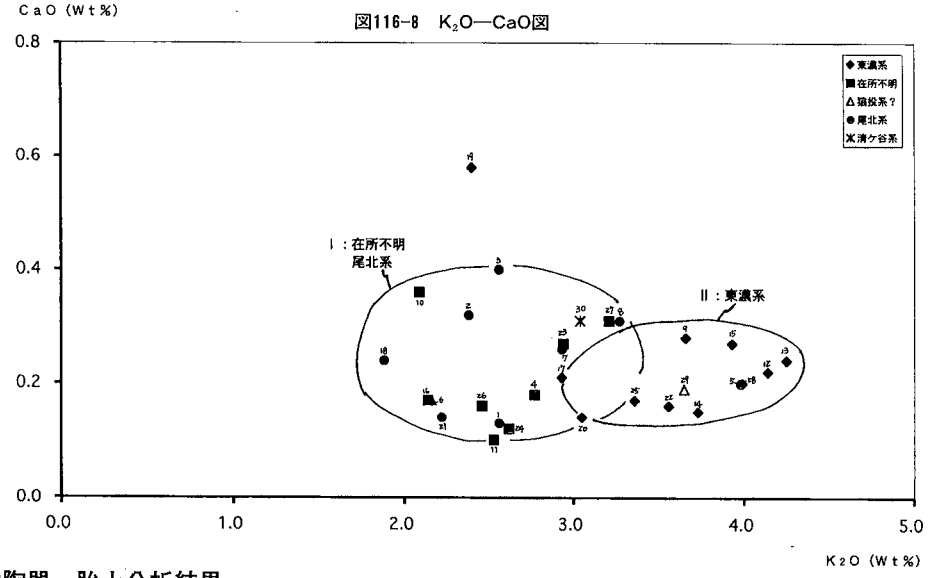


図116　屋代遺跡群出土灰釉陶器　胎土分析結果

表92　化学分析表

試料番号	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	NiO	Total	備考	
屋代遺跡群-1	0.12	0.21	17.65	75.68	2.56	0.13	0.89	0.47	2.06	0.23	100.00	Ⅲ	古代8期前半
屋代遺跡群-2	0.00	0.23	17.75	75.97	2.38	0.32	0.96	0.35	1.67	0.38	100.01	Ⅲ	古代9期
屋代遺跡群-3	0.00	0.07	16.30	77.92	2.56	0.40	1.14	0.07	1.47	0.07	100.00	Ⅲ	古代9期
屋代遺跡群-4	0.00	0.37	18.59	75.00	2.77	0.18	0.88	0.29	1.92	0.00	100.00	椀A	古代7期後半~8期前半
屋代遺跡群-5	0.00	0.18	20.93	72.18	3.98	0.20	0.86	0.15	1.52	0.00	100.00	椀A	古代8期前半
屋代遺跡群-6	0.02	0.39	17.14	75.90	2.16	0.17	0.85	0.37	3.00	0.00	100.00	椀A	古代6～7期
屋代遺跡群-7	0.09	0.02	14.23	79.55	2.93	0.26	0.89	0.07	1.96	0.00	100.00	Ⅲ	古代7期
屋代遺跡群-8	0.38	0.13	16.11	77.40	3.27	0.31	0.87	0.26	1.09	0.17	99.99	小椀	古代8期前半
屋代遺跡群-9	0.00	0.44	22.68	69.96	3.66	0.28	1.09	0.22	1.65	0.00	99.98	蓋	古代8期前半
屋代遺跡群-10	0.00	0.33	17.35	76.14	2.09	0.36	1.13	0.68	1.92	0.00	100.00	瓶類の底	古代9期
屋代遺跡群-11	0.21	0.16	16.25	77.69	2.53	0.10	0.99	0.53	1.55	0.00	100.01	椀A	古代9期
屋代遺跡群-12	0.00	0.48	22.56	69.87	4.14	0.22	0.95	0.04	1.75	0.00	100.01	Ⅲ	古代7期後半
屋代遺跡群-13	0.00	0.40	21.14	71.45	4.25	0.24	0.90	0.33	1.23	0.07	100.01	Ⅲ	古代9期
屋代遺跡群-14	0.00	0.39	22.14	70.85	3.73	0.15	0.76	0.51	1.33	0.13	99.99	Ⅲ	古代8期前半
屋代遺跡群-15	0.00	0.34	20.06	72.80	3.93	0.27	1.15	0.00	1.35	0.10	100.00	Ⅲ	古代10期
屋代遺跡群-16	0.00	0.35	14.34	80.53	2.14	0.17	0.77	0.00	1.70	0.00	100.00	段Ⅲ	古代8期前半
屋代遺跡群-17	0.00	0.48	20.89	72.42	2.93	0.21	1.13	0.00	1.93	0.00	99.99	椀A	古代9期
屋代遺跡群-18	0.00	0.00	18.53	76.89	1.88	0.24	1.17	0.00	1.10	0.19	100.00	椀B	古代13～14期
屋代遺跡群-19	0.00	0.35	21.72	71.78	2.40	0.58	1.19	0.12	1.87	0.00	100.01	椀B	古代15期
屋代遺跡群-20	0.00	0.38	20.04	73.00	3.05	0.14	0.95	0.50	1.95	0.00	100.01	Ⅲ	古代8期後半~9期
屋代遺跡群-21	0.00	0.20	16.11	78.72	2.22	0.14	1.07	0.31	1.18	0.05	100.00	段Ⅲ	古代13～14期
屋代遺跡群-22	0.00	0.48	20.77	72.33	3.56	0.16	0.75	0.42	1.53	0.00	100.00	椀B	古代15期
屋代遺跡群-23	0.13	0.26	15.28	77.97	2.94	0.27	0.87	0.00	2.28	0.00	100.00	椀A	古代7期
屋代遺跡群-24	0.03	0.54	18.90	74.48	2.62	0.12	1.10	0.11	1.83	0.27	100.00	Ⅲ	古代7期後半
屋代遺跡群-25	0.00	0.46	21.32	71.76	3.36	0.17	1.02	0.21	1.70	0.00	100.00	椀A	古代8期前半
屋代遺跡群-26	0.00	0.44	17.52	76.29	2.46	0.16	0.99	0.34	1.80	0.00	100.00	Ⅲ	古代9期
屋代遺跡群-27	0.00	0.38	17.38	74.81	3.21	0.31	1.28	0.24	2.20	0.18	99.99	Ⅲ	古代8期前半
屋代遺跡群-28	0.00	0.41	20.72	72.14	3.99	0.20	0.84	0.45	0.98	0.27	100.00	小椀	古代14期
屋代遺跡群-29	0.27	0.34	16.91	75.37	3.65	0.19	0.90	0.04	2.32	0.01	100.00	椀	古代15期
屋代遺跡群-30	0.30	0.41	19.88	71.24	3.04	0.31	0.99	0.30	3.35	0.18	100.00	短頸壺	古代7期前半

表93　組成分類表

試料No	SiO_2分類	備考		
屋代遺跡群-9	α	蓋	古代8期前半	MgO・大　東濃系
屋代遺跡群-12	α	Ⅲ	古代7期後半	MgO・大　東濃系
屋代遺跡群-13	α	Ⅲ	古代9期	MgO・大　東濃系
屋代遺跡群-14	α	Ⅲ	古代8期前半	MgO・大　東濃系
屋代遺跡群-15	α	Ⅲ	古代10期	MgO・大　東濃系
屋代遺跡群-17	α	椀A	古代9期	MgO・大　東濃系
屋代遺跡群-19	α	椀B	古代15期	MgO・大　東濃系
屋代遺跡群-20	α	Ⅲ	古代8期後半~9期	MgO・大　東濃系
屋代遺跡群-22	α	椀B	古代15期	MgO・大　東濃系
屋代遺跡群-25	α	椀A	古代8期前半	MgO・大　東濃系
屋代遺跡群-28	α	小椀	古代14期	MgO・大　東濃系
屋代遺跡群-4	β	椀A	古代7期後半~8期前半	MgO・大　在所不明
屋代遺跡群-10	β	瓶類の底	古代9期	MgO・大　在所不明
屋代遺跡群-11	β	椀A	古代9期	MgO・大　在所不明
屋代遺跡群-16	β	段Ⅲ	古代8期前半	MgO・大　在所不明
屋代遺跡群-23	β	椀A	古代7期	MgO・大　在所不明
屋代遺跡群-24	β	Ⅲ	古代7期後半	MgO・大　在所不明
屋代遺跡群-26	β	Ⅲ	古代9期	MgO・大　在所不明
屋代遺跡群-27	β	Ⅲ	古代8期前半	MgO・大　在所不明
屋代遺跡群-6	β	椀A	古代6～7期	MgO・大　猿投系？
屋代遺跡群-29	β	椀	古代15期	MgO・大　猿投系？
屋代遺跡群-1	β	Ⅲ	古代8期前半	MgO・小　尾北系
屋代遺跡群-2	β	Ⅲ	古代9期	MgO・小　尾北系
屋代遺跡群-3	β	Ⅲ	古代9期	MgO・小　尾北系
屋代遺跡群-7	β	Ⅲ	古代7期	MgO・小　尾北系
屋代遺跡群-8	β	小椀	古代8期前半	MgO・小　尾北系
屋代遺跡群-18	β	椀B	古代13～14期	MgO・小　尾北系
屋代遺跡群-21	β	段Ⅲ	古代13～14期	MgO・小　尾北系
屋代遺跡群-5	α	椀A	古代8期前半	MgO・小　尾北系？
屋代遺跡群-30	α	短頸壺	古代7期前半	MgO・大　清ケ谷

第５節　洪水（Ⅲ層堆積）以後の環境と開発

１　更埴条里遺跡・屋代遺跡群の環境史(3)

国立歴史民俗博物館研究部
辻　誠一郎

古代―中・近世の生態系　弥生時代から古墳時代にかけての水田・畑における農業一次生産の開始と発展によって平野の景観は著しい変化を遂げ、古代ではさらに、居住域、農耕地、山林、およびそれらを連続一体のものとすべく境界を埋め合わせる水辺（流路・溝）や土手・路傍が、人為が強く関わった生態系へと変わっていったことをこれまでの成果が示している。とくに、農作物としてあげられる栽培植物の種類が穀類だけでなくアサやベニバナ、エゴマなど利用形態が多様な植物群と組合わさっていったこと、境界の埋め合わせ域となる土手や路傍でのいわゆる雑草の種類が多様化を遂げたことは、古代の生態系が人の深い関わりによってつくられていたことを物語っている。このような多様な植物群や植生は、生産を目的とした人の活動だけで形成されるわけではない。植物をはじめ動物やこれらと深い関わりをもつ環境要素の人の活動に対する応答も大きな位置を占めている。すなわち、いわゆる雑草と呼ばれる植物群は、人による土地の撹乱と住居や農耕地という自然にはなかった土地の現出によって、新たな生活域が提供されたわけである。ごみ捨て場や農耕地といった窒素の多い土壌への適応の素質をもった植物群や、ふつうでは悪条件で育ちにくいと思われる場所にさえ独特の戦略を駆使して生きられる植物群にとっては、人がつくり出す土地は恰好の進出条件を備えた場所なのである。弥生時代や古墳時代では雑草でなかった植物群が、人の行き届いた土地への関わりによって、その生理・生態的な性質を変化させながら、つまり人の活動に対して応答しながら、新たな生態系をつくり出す原動力を担ったと考えることができるのである。『古代１編』で示された多種にのぼる植物相の多様性は、このことをよく示している。

ところで、ここでいう生態系とは、人や植物、動物、水、土壌などといった空間を形成している要素を漠然と羅列したようなものでなく、人を主体に据え、人を取り巻き、人の営みに深く関わる要素を環境として捉えた、いわゆる人主体―環境系を意味している。そこでは、人社会も変化するけれど、環境も人との関わりによって変化する。あるいは人との関わりによって本来もっていなかった性質や関係をつくり出す。このように捉えれば、植物は人との関わりによって進化し、人主体―環境系という関わり体系も進化すると考えることができる。

人と植物の関わり史―新たな視点　屋代遺跡群におけるこのような生態系の捉え方から、古代から中・近世にかけての植物遺体群と人との関わりを検討してみよう。

水田や畑での農業一次生産が古代から中・近世にしっかり根づいていたことは、遺跡の発掘調査による水田など生産遺構の確認とともに、イネやコムギ属をはじめとする栽培植物群の産出によって裏付けられる。一方、上で述べたように人の関わりによって新たな空間が現出し、人がかかわらない場所がないくらいに、それまでにない生態系が形成されていったことが分かってきた。そこで際立ってきたのは、野生植物や雑草として扱われている植物群であった。土手や路傍、住居周辺といった空間だけでなく、水田や畑にも見られる植物群である。縄文時代では見られなかった多様性である。

ところで、いわゆる雑草とされる植物群は、農業一次生産を営むには厄介者・邪魔者として嫌われるし、土手や路傍、畦の雑草はたくましいがゆえに刈り取りや焼き払いといった人の管理行為下に置かれて

いて、マイナスのイメージが強い。果たしてそうなのだろうか。

人にとって食料生産は重要な位置を占めていることに違いないが、栽培植物としての農作物にしか考えが及ばない傾向がある。とくに食料生産の歴史をたどるときにはこの傾向が強いように思われる。すなわち、イネやコムギ、オオムギといった主要な穀類がどこまで遡るのかという視点にしか立っていないことが多い。ここで、江戸時代初頭に成立した『清良記（親鑑月集）』(1628) に記載されている野生植物利用および野生植物の栽培事例を見てみると、種数では栽培植物に匹敵する多種の植物群が利用されていたことが分かる。たとえば、野生植物利用では、ギシギシ、スベリヒユ、ヨモギ、オオバコ、ツクシなど、野生植物の栽培が、アカザ、タデ、ノビル、ヒユ、ヨメナなどに及んでいる。これらの植物群はたしかに野生植物としても扱いうるが、どちらかと言えば人が撹乱した土地あるいは人里と呼ばれる集落域にふつうなものであり、雑草としてもふつうな植物群が多い。アカザやヒユなどは種子（果実）の利用だけにとどまらず、葉・茎などさまざまな部分のさまざまな利用形態が認められる。これらの植物群は救荒植物として扱われることが多いが、飢饉に見舞われたときなどは確かに栽培や利用が奨励されたためであろう。しかし、飢饉のときだけ利用されるにはあまりにも豊富な植物の習性・効能・調理法・栽培法の知識が集成されており、飢饉にして一夜に形成された知識体系とは考えにくいのである。青葉 (1991) が日本における野生植物利用の特異さを指摘するように、また、山田 (1995) も日本における野生植物利用の重要性を提起しているように、より以前に形成されてきた人と植物の関係であったと考えたほうが無理がない。

そこで、古代においてつくり出された生態系の中身、そしてカマド遺構から産出した植物遺体群を振り返ってみると、そこには上に見た野生植物利用あるいは栽培された野生植物の多くが盛り込まれていることが分かる。すなわち、遅くとも古代以降の屋代遺跡群一帯においては、人の関わりに対する応答として変化してきた植物群もまた人の生活に深く関わっていたと見ることができよう。農耕管理が今日ほど合理的でなかった当時では、農作物不作に対して農耕地周辺の人里の植物をつねに利用体系に取り込んだ生活史が育まれていたと考えられるのである。人の関わりによって作られた雑草やその集団が、再び人の生活の仕方を変えるという、主体のはたらきかけ、主体に対する環境のはたらきかけ、またそれに対する主体のはたらきかけが具体的に描き出せそうである。

このように見てみると、弥生時代から古墳時代、古代、中・近世へと、人の環境への関わりが変化するにつれ、植物群の進化とともに相互の関わり方である生態系も進化したことは明らかである。その内容をどこまで描き出すことができるのか、遺跡発掘調査でどのような方法でそれを描き出すのか、それが今後の大きな課題になるかも知れない。

生態系は一方的な人の破壊活動によって変質していくのではなく、人のはたらきかけとそれに対する応答の結果として、水田や畑、土手や路傍における生物多様性、生態系多様性をつくり出してきたことを屋代遺跡群の植物遺体群は導き出している。植物遺体群の調査が単に植生を復元するだけのものではなく、人の生活と環境意識の変化過程を読み解くものとして位置づけられる契機となれば、ここでの調査はたいへん意義深いものとなるに違いない。

引用文献

青葉　高　1991 『野菜の日本史』317頁　八坂書房

山田昌久　1995 「日本における13～19世紀の気候変化と野生植物利用の関係」『植生史研究』第3巻　3-14頁

２　洪水（Ⅲ層堆積）以降の環境と開発

パリノ・サーヴェイ株式会社
辻本　崇夫

屋代遺跡群・更埴条里遺跡、窪河原遺跡の土地利用変遷に関して、現段階で判明していることを表４にまとめた。ここでは、古代以降について、まとめておきたい。

古代の土地利用　飛鳥時代・平安時代には条里水田が作られ、水田域が自然堤防Ⅰ上まで拡大される。一方、更埴条里遺跡のＫ地区や屋代遺跡群の高い場所では集落が作られる。また、自然堤防Ⅰ上にあたる屋代遺跡群では畝跡が検出され、畠作が行われていたと推定される。この時期、窪河原遺跡では、千曲川の旧流路が検出され、河川の影響を頻繁に受けていた。また、後背湿地にあたる更埴条里遺跡では、標高の低いＡ・Ｂ地区で湿地化が進み、水田が一時期放棄されたらしい。この時期、「弥生の小海退」に伴う気候の湿潤化のため、河川作用の活発化や後背湿地での水位上昇が起こり、より標高の高いところに生活基盤が移った可能性がある。その後、Ａ・Ｂ地区は９世紀以降水田化され、条里水田が低地へと拡大していく。微化石分析結果等からみると、この時期にも小規模な洪水があったと考えられるが、耕作等によって撹乱されており、その痕跡ははっきりしない。なお、屋代遺跡群⑥ａ区では、第１～５水田が確認されている。おそらく、これらは、洪水を受ける度に耕地の更新を繰り返した結果と考えられる。

平安時代後期以降の土地利用　９世紀末の「仁和の洪水」は規模が大きく、遺跡全体を厚く砂が覆っている。その後、自然堤防Ⅱが安定化してくると、後背湿地や旧河道は水田、自然堤防上は畠や集落として利用されるようになる。特にⅡ層以降の水田域では富栄養化が進み、施肥などによる水質への影響が顕著になる。この時期にも洪水が頻繁にあったとみられるが、耕作等が行われた結果、撹乱の影響が著しく堆積物の層相などからは確認できない。

第12章　結　　語
—大洪水以後の更埴条里遺跡・屋代遺跡群—

仁和の洪水　縄文前期から近世に至る複合遺跡である更埴条里遺跡・屋代遺跡群の各時代層の中で際立つのが、本報告書が対象とした洪水砂層（III層）の存在である。この洪水のきっかけとなったとされる北八ヶ岳の稲子岳と天狗岳間の東岸壁大崩壊による土石流の発生が、先頃の年輪年代測定によって西暦887年と判断されたことは(註)、非常に意義深いことであった。更埴条里遺跡の条里水田の田面観察により、この一帯が洪水砂に覆われた季節は春から初夏にかけてであることが想定されており（河西1999）、年代測定の対象となったヒノキは秋口まで成長していたことが指摘されている。この点、『扶桑略記』の西暦887年8月26日の記載と『類聚三代格』および『日本紀略』の西暦888年6月20日の記載のずれに対する解釈も含め、大崩壊による土石流の発生から、更埴条里遺跡・屋代遺跡群を覆い尽くすに至る洪水の経過が今後解明されていくことを大いに期待したい。

復興への動き　洪水発生の過程においては、人為的にそれをくいとめようとした痕跡も認められた。しかし、結果的には集落・水田とも覆い尽くされる大災害となった。これに対し、砂の堆積によって高燥化した後背湿地Ⅰ群内における集落の成立、および旧条里坪区画を復元しようとする動きは、災害をいち早く克服しようとする大きな力が働いていたことを示している。ただ、坪区画復元がどれだけIII層面での水田経営と呼応するものであったかについては明確にすることができなかった。今後の周辺における発掘調査等からこの点が明らかになっていくことを望みたい。

洪水後の時間軸の設定　層位的には洪水砂堆積後の早い段階（III-2層）、洪水砂上部の土壌化がみられる段階（III-1層）、新たな堆積層がみられる段階（II層）に分け、それぞれ古代2、中世、近世という時代の大枠を設定した。自然堤防II群（窪河原遺跡）においてはIII-1層に対応する層位が把握され、中世以降の営みの存在が確認された。

この時代枠の内古代2では、III層堆積後を『古代1編』から継続する土器編年の古代8期後半と捉え、以後土師器杯Aの変化に従い古代15期までの時間軸が設定された。さらに伴出する灰釉陶器の年代観から各時期の実年代が比定され、これによって洪水後からIII層上部が土壌化する以前の遺構変遷を9世紀末から11世紀後半の時間枠の中でたどることができた。

集落の変遷と新たな開発　このように設定された時間軸に沿って集落の動きを捉えると、洪水直後の後背湿地Ⅰ群での展開（古代8期後半～10期）から自然堤防Ⅰ群での展開（古代13期～15期）という大きな変遷のあったことが明らかになった。これは集落域の移動のみならず、竪穴建物の構造変化を伴う大きな変動であった。この変動の転機となる古代11～12期（10世紀後半）においては、更埴市域一帯の用水体系の原形となる用水路の掘削が行われていた。洪水直後には条里型地割復元を指向する動きもみられたが、この段階で新たな大規模開発が着手されたことを物語る。しかし、この開発の主体となった集落の実体、再整備されたと考えられる耕地の状況を把握するには至らなかった。この点についても今後の成果を待つところである。

中世への移行　中世集落の出現は、古代15期の集落が存在した自然堤防Ⅰ群南端部（更埴条里遺跡K地区・屋代遺跡群①区）にいち早く認められた。時間的には連続する様相をみせるが、竪穴から掘立柱へという建物の大きな変遷がみてとれる。さらに集落内に存在する多くの墓と集落外に成立する墓域が中世集落のあり方を特徴づけている。

やや遅れて13世紀頃、自然堤防Ⅰ群最高所域（屋代遺跡群④～⑤区）と自然堤防Ⅱ群（窪河原遺跡H2区）への進出をみる。前者は古墳時代以来の伝統的な集落立地点であり、７世紀後半から８世紀前半には官衙風建物群が存在していた。この地を再び占拠した中世集落は、10世紀後半に開発された水路を再整備し、それによって全体を区画し、主体部と思われる範囲を濠により区画した２重の囲みをもつものである。立地・構造・用水の再整備という観点からみて、かなりの勢力をもつ集落であったことが想像される。

生産域の把握　以上の中世集落の周辺には部分的ではあるが水田・畠の存在が確認された。更埴条里遺跡Ｋ地区集落南端で検出された水田状区画の痕跡は、中世水田と断定することはできないが、後背湿地Ⅰ群内に水田が広がっていた可能性を示唆する。また、窪河原遺跡H2区およびH6区で確認された畠および水田跡は、後背湿地Ⅱ群において広範囲に生産域が展開していたことを示している。屋代遺跡群①区から③区で確認された畠跡も含め、再整備された用水とこれらの耕地との関わりを今後解明していく必要があるだろう。

近世の景観　Ⅱ層対応の段階では、中世までの建物跡や墓などの遺構が集中していた状態とは一変し、生活の痕跡がほとんど認められない。後背湿地Ⅰ群では高密度のイネのプラント・オパールが確認され、自然堤防Ⅰ群内でもイネ属由来の植物珪酸体が多量に検出されるなど、水田耕作に関わる資料が豊富に得られている。自然堤防Ⅱ群では近世においても複数回の洪水にみまわれた痕跡があり、洪水堆積物を利用した耕作が行われていた。しかし、自然堤防Ⅱ群の安定とともに氾濫の影響も少なくなり、後背湿地Ⅰ群に至るまで安定した耕作が行われるようになったものと思われる。このことから後背湿地Ⅰ群を中心に検出された遺構は、水田耕作等に関わるものと考えられ、近世における更埴条里遺跡・屋代遺跡群に対しては、ほぼ一面が耕作域となっていた光景が想起される。

旧堰の検出　更埴市域では昭和40年代に大規模な圃場整備事業が行われ、耕地区画、用水網が改変され現在に至っている。近世遺構検出段階においては、この圃場整備以前に存在していた堰が検出された。これらの堰と中世以前の溝との方向性の一致点や重複の状況と、地図上での対比によって10世紀後半にまで遡る用水開発の端緒をつかむことができた。これに加え、中世集落の区画の名残など、昭和前半段階までの地表には中世以前の多くの情報が残っていたことを知ることができた。

おわりに　「序」に述べられているように、仁和の洪水によって押し寄せた砂が一面を覆っている光景がどのようなものであったか全く想像することができない。しかし、それは当時の人々にとって紛れもない「現在」の景観であった。そしてこれ以降、厚く堆積した砂を地表として人々の営みが再開される。この災害からの復興段階以降昭和の景観に至る状況について、断片的かつ不十分ではあるが、本報告書で資料提示をすることができた。今後県内諸地域において、同一の洪水砂堆積後の動向に関わる資料が増加し、仁和の洪水が信濃における平安後期以後の社会に与えた影響が明らかになっていくことを期待したい。本報告書がその一助となれば幸いである。

註　朝日新聞1999年12月23日の記事による。このうち洪水のきっかけとなる大崩壊に関わる学説は信州大学教授河内晋平氏によるもので、埋没していたヒノキの年輪年代測定は奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏が行った。

引用文献

河西克造　1999「第８章第８節　条里水田の成立と展開」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26―更埴市内その５―　更埴条里遺跡・屋代遺跡群―古代１編―』

報　告　書　抄　録

書　　名	上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書
ふ り が な	こうしょくじょうりいせき・やしろいせきぐん（おおざかいいせき・くぼがわらいせき）（こだいに・ちゅうせい・きんせいへん）
遺　跡　名	更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）―古代２・中世・近世編―
巻　　次	２７
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
NO	５０
編・著者名	市川桂子、寺内隆夫、鳥羽英継、宮島義和
編集機関名	長野県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒387-0007　長野県更埴市屋代字清水260-6　長野県立歴史館内　Tel　026-274-3891
発行年月日	２０００年（平成12年）３月１７日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
こうしょくじょうりいせき 更埴条里遺跡	ながのけんこうしょくしやしろ 長野県更埴市屋代	20216	29	36°31′50″～ 36°32′20″	138°8′30″～ 138°8′40″	1991～1993	70,000	上信越自動車道建設に伴う事前調査
やしろいせきぐん 屋代遺跡群	こうしょくしあめのみや 更埴市雨宮	20216	31	36°32′20″～ 36°32′50″	138°8′30″～ 138°8′40″	1991～1994	46,000	
おおざかいいせき 大境遺跡	更埴市雨宮 （屋代遺跡群内）	20216	31-13	36°32′45″	138°8′35″	1993	500	
くぼがわらいせき 窪河原遺跡	更埴市雨宮 （屋代遺跡群内）	20216	31-17	36°32′50″～ 36°33′00″	138°8′25″～ 138°8′45″	1990、1993 ～1994	20,000 上信越道 5,500 中央道	

所収遺跡名	立　地	種　別	時　代	主な遺物	特記事項
更埴条里遺跡	千曲川の後背湿地Ⅰ群	集落　水田？	古代	緑釉陶器・緑釉緑彩陶・越州窯系青磁・布目瓦・銅印・銅鋺・隆平永宝	９世紀後半～10世紀の集落用水路の開発
		集落　水田？	中世	同安窯系青磁	中世の集落・墓
		水田？	近世		
屋代遺跡群（含む大境遺跡）	千曲川の自然堤防Ⅰ群	集落　水田？	古代	緑釉陶器・白磁・軒丸瓦	10世紀後半～11世紀の集落用水路の開発
		集落　墓域　畠	中世	同安窯系青磁・木製品	中世の集落　墓域　用水路の再整備
		水田？	近世		
窪河原遺跡	千曲川の自然堤防Ⅱ群	集落　墓域 畠　水田	中世	珠洲甕・銭・骨製笄	中世の集落・火葬墓・火葬施設
		水田　畠	近世	土器片	

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　50

上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　27

—更埴市内　その6—

更埴条里遺跡・屋代遺跡群

（含む大境遺跡・窪河原遺跡）

—古代2・中世・近世編—

本文

発　行　　平成12（2000）年3月26日
発行者　　㈶長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒387-0007　更埴市屋代字清水260-6
長野県立歴史館内
TEL　026-274-3891
FAX　026-274-3892
印　刷　　信毎書籍印刷株式会社